第35回鹿児島県漁村青壮年婦人グループ活動実績発表大会資料

平成元年１月

鹿児島県水産振興課

発　表　課　題

○明日の漁業は我々の手で（私たちの青壮年部活動） …… 1

指宿市岩本漁協青壮年部　　坂　元　広　志

○アオアジ刺網漁業を導入して …… 9

加世田市漁協青年部　　阿久根　金　也

○漁業を志して …… 17

徳之島漁協　　作　城　三　吉

○後継者として魚類養殖に取組んで …… 25

高山町漁協青壮年部　　谷　山　　豊

○地域おこしの一端をになって …… 31

黒之浜漁協青年部　　福　留　建　三

○私達の婦人部活動（漁協婦人の役割を考えて） …… 40

東町漁協婦人部　　浜　島　明　野

○組合せ漁業に取組んで …… 45

川内市漁協黒潮会　　濱　田　成　敏

明日の漁業は我々の手で
― 私たちの青壮年部活動 ―

指宿市岩本漁協青壮年部　　坂　元　広　志

1　地域と漁業の概要

私の住む指宿市は，人口３万３千人。薩摩半島南東部に位置し，温泉の街として全国に知られております。

市内には二つの漁協があり私の所属する指宿市岩本漁協は，市の北部にあります。海岸線は，４km弱と狭く，共同漁業権は，指宿市漁協との共有になっています。（図１）正組合員152名，准組合員６名，計158名からなり，主な漁業種類は，沖合域では，瀬物一本釣漁業，刺網漁業があり，一本釣は遠く台湾・南シナ海までいくようになりました。又，沿岸域では，小型機船底曳網漁業，湾内刺網漁業等があります。

62年の水揚高は，約８億７千万円で，水揚高は，近年横這い状態が続いています。（図２）

2　青壮年部の組織

青壮年部の前身，今和泉水産研究会が，会員26名で発足したのは，昭和26年でした。共販体制の確立等の実績を挙げましたが，30年代県の先達漁船事業により，地区漁業の主体が，沖合へ転換後は，活動は休眠状態に入っていました。しかしこのままの状態では，地区漁業の振興は，はかられないと昭和56年，豊かな漁村づくりを目ざして，指宿市岩本漁協青壮年部として再発足し，今日に至っています。

現在部員は47名。一本釣部会（30名）と底曳部会（17名）で構成されています。一本釣部会は20才代の部員も多数いますが，底曳部会はいづれも30才代です。

しかし，一本釣部員は，沖合出漁のため不在が多く，活動は底曳部員が主体となってしまいます。

青壮年部再発足以来，私達は種々の活動をしてきました。

イタヤ貝，赤ウニ等の養殖試験。ヒジキの増殖試験。ガザミの放流。ヒラメ・シマアジの中間育成と放流。イカ柴や産卵用タコ壺の投入。沈船魚礁設置の漁場造成や未利用資源の活用等です。

以下，活動の概略について話しますが，最初にお断りしておきますが，私共の活動の歴史は，失敗の繰り返しであったという事ですが，他山の石としてお聞き願えればと思います。

3　活動の状況と成果

さきにも述べたとおり，地先漁場は狭く，恵まれた漁場とは申せません。この為，市・漁協で

は，並型魚礁・沈船魚礁・イカ柴投入等積極的に漁場造成に努力しています。

私達青壮年部としても，如何にしてこの海を豊かなものにするべきか試験を試みてきました。

私達がここ数年実施してきた資源増殖対策或いは未利用資源の活用について，先輩から見聞した事や，私の実体験を含めて話したいと思います。

(1)イタヤ貝・赤ウニ養殖試験

青壮年部結成後，最初の事業はイタヤ貝の養殖試験でした。昭和20～30年代にかけて，指宿・山川沖合はイタヤ貝が水揚されていたとの事でした。私達は再びイタヤ貝の産地にと思い立ったのが発端でした。

55年，島根県に視察にいきました。翌56年，5,000個の種苗を島根県から導入し，1年半の試験養殖ののち，最終的に1,000個が残りました。ところが，出荷直前に，陸上水槽に蓄養中，酸欠で全滅させるという事故をおこしました。

61年には，県栽培漁業センターから赤ウニ種苗5,000個を購入し，養殖試験を開始しました。

初年度の成長は順調で，62年3月には平均殻長32～33mm。40mmをこえるものも1割程度ありました。62年夏には出荷出来るものと期待していましたが，その後成長は鈍り，出荷もままならず，先頃，成長の悪い分は放流し，成長の良いものだけを残して現在も飼育中です。

(2)ヒジキ増殖試験

61年は，赤ウニ養殖と併行して，ヒジキ増殖も試みました。餌料用及び藻場造成と，少しでも収入の足しになればと思って始めた仕事です。沖合の消波施設の10箇所に，篭式増殖法で実施したもので，順調な着生・繁茂をみました。

62～63年と繁殖状況を観測しておりますが，拡がりをみせることなく，消滅してしまいました。本年度は時期を失しましたが，来年度は再び継続して，ヒジキ増殖に挑戦していきたいと思います。

(3)魚類放流事業

現在，栽培漁業の推進という事で，各地で各種の放流が実施されています。

岩本漁協管内でも，何種類かの放流を実施しております。

鹿児島湾マダイ栽培漁業推進事業によるマダイ。その他ヒラメ・シマアジ等中間育成・放流しています。

i) ヒラメ中間育成と放流について

ヒラメ放流が開始されたのは，59年からです。

タイに続く放流魚種は何かと模索していました。そしてクルマエビはどうかという話がおこり，青壮年部で熊本県天草に視察にいきました。視察先の漁協で，ヒラメの放流効果を聞き，クルマエビよりもヒラメだという事で始めたのが発端です。

59年，3cmサイズの種苗6,000尾を入手しました。

普及所等の推めもあり，網イケスで中間育成の上，放流することに決めました。

育成期間は26日，育成歩留67%，全長7cmで約4,000尾を放流しました。

この時の放流魚が（放流魚は全て白化個体で，すぐに識別できます。）60年4月に採捕されました。全長37cm。650gでした。

これに力を得て，翌60年は3,300尾を中間育成・放流しました。

その後，市でも放流事業に力を注いで頂き61年度からは，市が事業主体となり「豊かな海づくり事業」で，61年度30,000尾，62年度及び63年度は各40,000尾を実施しました。現在も中間育成管理と放流は青壮年部が市の委託を受けて実施しています。

本年度は2回に分け，育成・放流しました。第1回は10,000尾を4月2日から5月7日までの35日間，歩留75%，全長5～6cmのものが平均11cmになりました。第2回は5月7日から6月18日の43日間，30,000尾で70%の歩留15～17cmに成長しました。第2回目のうち6,000尾を海づくり記念行事の一環として7月19日迄育成，同日小学生による体験放流がなされました。

特に効果調査は実施していませんが，放流後は，指宿市の2つの漁協の水揚合計は年々上昇しております。（表1）

ii) シマアジの中間育成と放流について

本年6月，第2回ヒラメ放流の日に，ヒラメ中間育成経験を生かして，シマアジ飼付け型栽培漁業技術開発事業に協力してもらいたいとの打診がありました。

そこで県，普及所・県栽培漁業協会・市・漁協・青壮年部6者協議の結果，青壮年部で引き受ける事にしました。

7月9日，県栽培漁業センターから輸送されてきたものを2台のイケスに分養しました。中間育成も順調に進み，10月8日イケス1台分，3,115尾に標識をつけ，11日に放流しました。当初の平均体長11cmが20cm前後に成長しました。将来，飼付け型漁業として定着できれば，沿岸漁業者の所得向上，操業の容易さ，その他種々の面で，明るい将来が期待されます。

青壮年部として，協力はおしみません。今後この事業が一日も早く成功するよう，県の今後の事業継続を願うものです。

（4）未利用資源の活用について　－ニギス加工－

現在，南薩沖合の小型底曳網漁業に13隻が出漁し，ヒゲナガエビ漁に従事しています。私もその一員です。

エビ漁には，多量のニギス（メヒカリ）が混獲されます。この混獲されたニギスは今迄投棄されていました。そこで私達は，これを少しでも収入源にと考えました。この為，宮崎県土々呂漁協に味醂干しの研修に行きました。土々呂では150円／kgで販売され，加工業者によって製品化されておりました。

私達は帰って直ぐに加工に取り組みました。調味料の製法から，干し網，加工場所の確保，処理加工のための婦人部への協力依頼等全ての面で1からの出発でした。

「ニギス」という名は一般には知名度は殆んどありません。この為各種産業祭等に出品しています。幸いに味は好評ですが，包装・製品の見栄え等改善の余地は未だあると思っています。

又，味醂干し以外の利用も考え，学校給食用のフライ原料として，市内の小学校で試食してもらい，これも好評でした。近日中に正式納入の手続きを行いたいと思います。

4　今後の計画と課題

当漁協でも高齢化の波がおし寄せています。私達若者は湾外にも操業出来ます。然し高齢者はそうもいきません。その為，私達青壮年部の若い力で，地先の海を豊かに作り育てていく義務があると思っています。この為，藻場づくり，漁場づくり，栽培漁業にと一層努力していきたいと思います。然し，これは単に1漁協だけの問題ではありません。

マダイ放流が鹿児島湾内18の漁協の協同作業により成果を挙げたように，他の魚種にも同様の努力が必要ではないでしょうか。

幸いヒラメについては，隣接の喜入町，指宿市両漁協が，中間育成を開始し，或は計画しています。

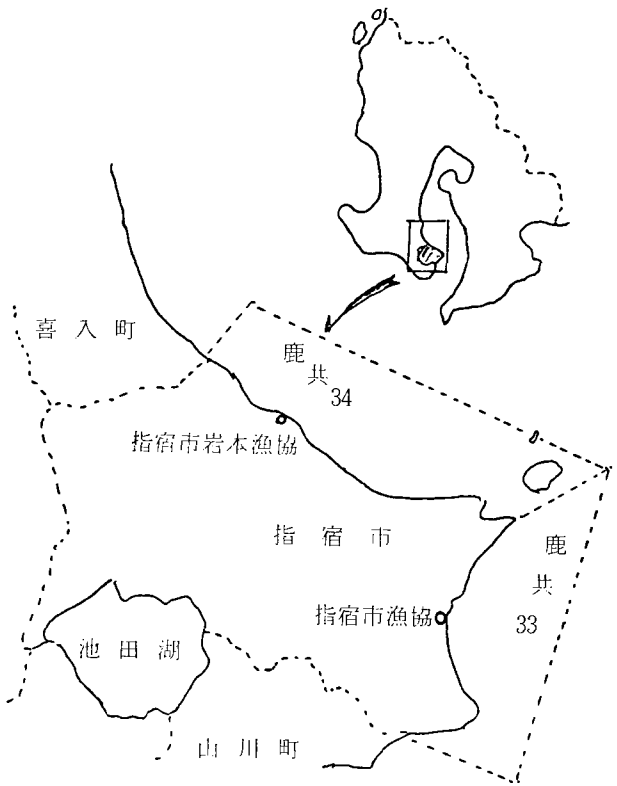
今，放流は単協夫々の思惑によって実施されていますが，今後は統一された意志によって実施することにより，一層の効果を産むのではないでしょうか。

加工についても，地元で水揚されるカワハギ・カマス等で，安い時期のものの加工により，魚価の向上が期待出来，かつ，婦人に1時間でも2時間でも生活に合った働ける体制が出来ればと思います。

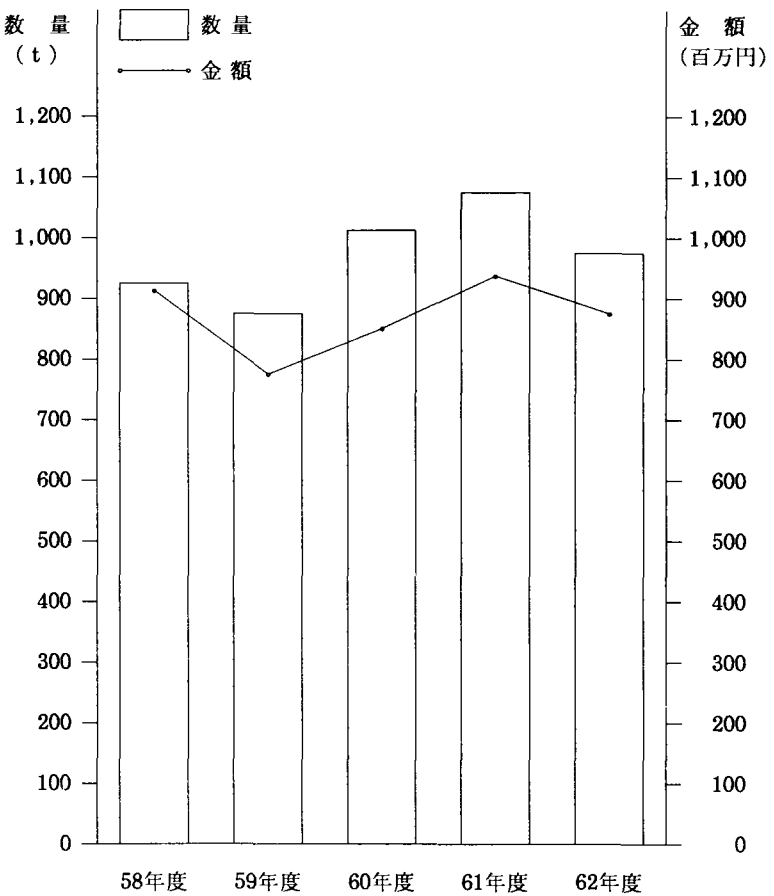
幸いにして，漁協の将来構想として，冷凍冷蔵庫や，加工場の建設が予定されているとの事です。

明日の漁業は我々の手でと大層な題で話してきましたが，暗中摸索の態で今迄歩いてきました。今後もあまり変らないのでは…と懸念していますが，関係各位の今後とも変らぬ御指導をお願いして私の話を終ります。

〔図１〕指宿市岩本漁協位置図

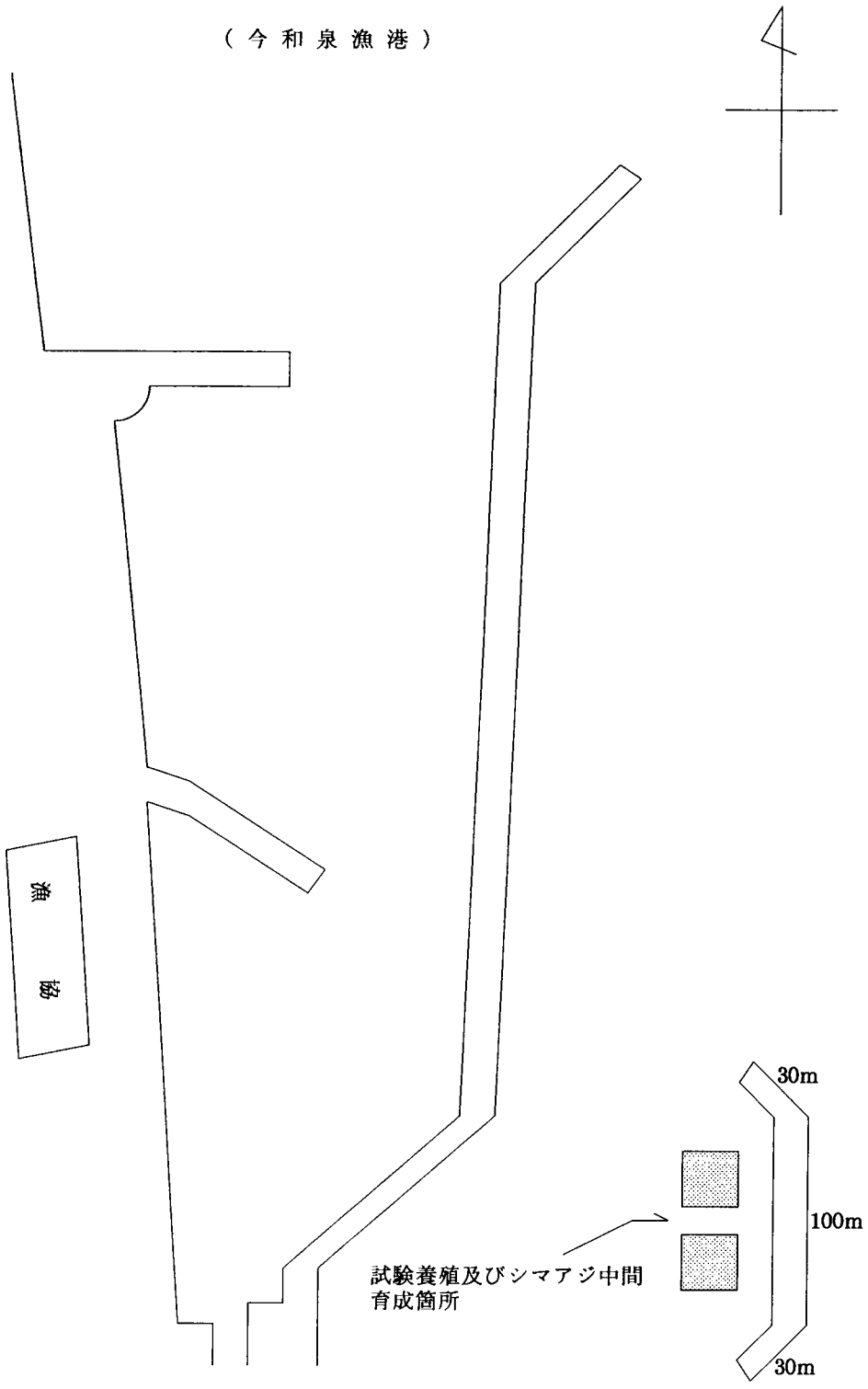


〔図２〕指宿市岩本漁協水揚高の推移

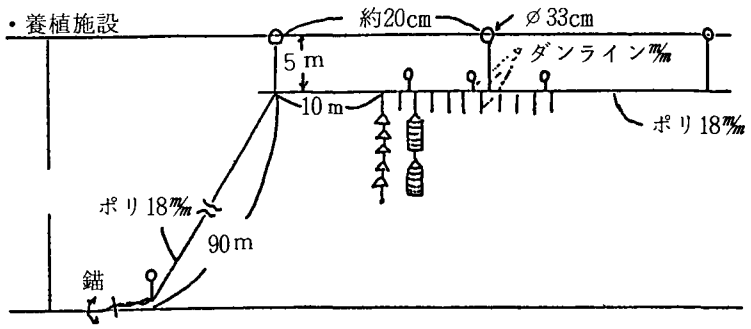


（漁協資料より）

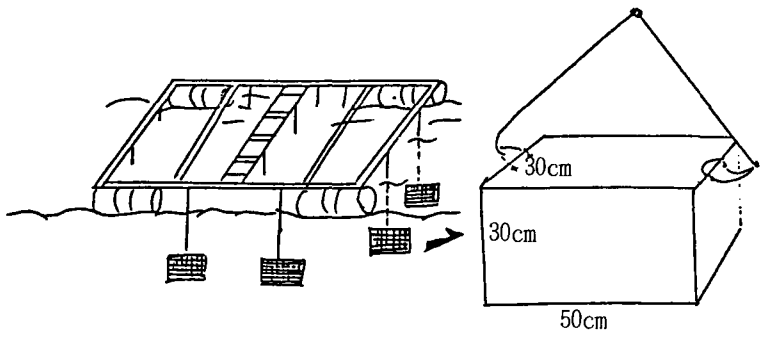
〔図３〕試験養殖・中間育成位置図



〔図4〕イタヤ貝養殖施設



〔図5〕アカウニ養殖施設



ミカンコンテナ

〔表1〕指宿市のヒラメ卸売市場取扱高

（単位：kg）

漁協名＼年次	59	60	61	62
指宿市	300	796	1,193	2,097
指宿市岩本	407	375	667	316
計	707	1,171	1,860	2,413
59年対比	100.0	165.6	263.1	341.3

指宿市農林水産課「農林水産業の概要」より

〔表２〕ヒラメ中間育成結果表

年度	放養尾数	育成期間	全長（平均）		放流尾数	歩留	備考
			初期	放流時			
		d/s	mm	mm		%	
59	6,000	5．1～5．26 26	30	70	4,000	66.7	
60	3,300	5．25～6．18 25	75	119	2,850	86.4	
61	30,000	4．4～4．27 23	50	100	26,100	87.0	
62	10,000	4．18～5．2 15	70	110	9,000	90.0	
	5,000	4．18～5．15 28	30	70	4,250	85.0	
	25,000	6．30～7．25 26	50	110	17,500	70.0	
63	10,000	4．2～5．7 36	50	110	7,500	75.0	
	24,000	5．7～6．18 43	50	160	16,800	70.0	
	6,000	5．7～7．19 74	50	170	3,000	50.0	第１回海づくりの日記念放流

※　61年度以降の放流は，指宿市漁協と半数づつ。

「アオアジ刺網漁業を導入して」

加世田市漁協青年部　　阿久根　金　也

1　漁協の概要

私達の住む加世田市漁協は，日本三大砂丘の一つ吹上浜の南端に位置し，加世田市と金峰町の海岸線の地先海面を漁場としています。そして，その砂浜を生かしてのバッチ網を始めとする各種の網漁業の盛んな所です。

組合員は，正組合員123人，准組合員208人の計331人からなり，昭和62年度の年間水揚げ高は，バッチ網によるチリメンなどの加工品が309トンの４億３千万円，生鮮魚介類が447トンの１億５千万円，合計756トンの５億８千万円でした。

2　漁協青年部の概要

私の所属する加世田市漁協青年部は，昭和59年２月に発足した比較的新しい組織です。会員数は13人で，ガザミ中間育成と放流，沿岸清掃，組合行事への協力，他漁協青年部との交流などです。残念ながら活動は活発とは言い難いのですが，部員の意見交換の場はひんぱんに設けているところです。

3　課題選定の動機

私の生れた加世田市小湊は，帆と櫓の時代から遠く隠岐の島や能登半島にまでサバ釣りにでかけた漁業の盛んな所で，私も小学校時代から日曜日には父と海に出ておりました。昭和56年に鹿児島水産高校を卒業してからしばらくは，外の世界を見たくて，神奈川県三崎のマグロ延縄船に乗っていましたが，翌57年７月家業の漁業を継ぐために加世田に帰って来ました。

帰って来た当時，父は吾智網を主体に，ヒラメやウシノシタの刺網，イカ籠を操業していました。その年は図１のように吾智網でチダイがたくさんとれた年でしたが，それ以降吾智網の漁獲量は少なくなる一方で，減少分をカバーするためにイセエビ刺網やバショウカジキの流し刺網，アオアジ漁業も取り入れました。

現在の操業形態を図２に示しました。主力の吾智網漁業がタイ，アジ，瀬物を主体に３月から11月まで，11月から４月までアオアジ網，３月から４月がウシノシタ網で，これにバショウカジキ流し刺網，ヒラメ刺網，イカ籠，イセエビ刺網が加わります。昨年からバカ貝，今年になってツキヒ貝も発生しています。

4　活動内容と結果

ここで私が昭和59年に初めて加世田に導入し，一番期待しているアオアジ漁業をご紹介します。

この漁法も，吾智網の不振をカバーするために導入した漁法の一つで，長さ75m網丈5.4m目合6.5節の網５～６反の固定式刺網です。

この漁法は江口の友人が最初に考案し，それを二人で智恵を出し合いながら開発したもので，従来からあったアジ刺網とは全然違います。従来の網は網地がアミランで，網目も半すわり位ダブついていました。それを私どもはテグスの２号にし，網目もアジがかかりやすいように出来るだけ真四角になるように張らせました。

皆からテグス網は長持ちしないとか，魚がはずしにくいと言われ，しまいには今までの網と変わるものかと笑われる始末でした。しかし，実際に同じ魚群に網を入れて比べたら，従来の網の４～５倍も魚がかかり，江口では網屋の網が奪い合いになるぐらいだったそうです。それが図３の上段の網ですが小々不満も残りました。

皆さん御承知のようにアオアジは動きの早い魚で，魚群を見付けたら素早く網を張らねばなりません。沈子が軽いと網の沈降速度が遅く，魚が逃げてしまいます。早く沈むように浮子を軽くすると魚の重みで網が早く寝てしまいたくさんとれません。沈子と浮子のかねあいを誰も教えてくれず，一番苦労しました。そして，あれこれ工夫して，おもりロープを一本増やし，浮子も強弱の２種類を１ヒロ間隔に交互に入れる現在の方式に落ち着きました。最初作った網とくらべると，３割ほど浮子が強くなっています。改良の結果，網を上下に引っ張る力が強くなったため，今までの網と比べて魚がかかっても網なりを保つ時間が長くなりました。そして，その網で850kgのアオアジを獲ることができました。次の年に加世田市漁協の３隻が同じ網を作り，現在では，10隻がこの網をもっています。水揚げも図４のように半分近くをこの刺網が占めるようになりました。

操業は，父と二人で行います。出港は夕方４時頃で，魚探で魚群をさがします。漁場は水深20～30mで，近くに魚礁がなく底質が砂地のところが網を破りません。魚群は大きいものだと長さ200～300m，高さ10～15mで，海底と同じ色の魚探反応を示します。多いときで60隻，少ない時で10隻位の船みんなで魚群を探します。皆で魚群をさがすのは，たくさんの船でさかした方が効率がよいからです。それでも，３日に１回魚群が見つかれば良いほうで，魚群が見つからないときは午後７時頃には帰港します。

魚群を見つけるとまわりの船に知らせます。無線で魚群発見の知らせを聞くと，全船我先にと発見した船に向かいますが，それはさながら戦争のようです。なぜかというと，着いた順に少しでも良い場所に網を入れる権利が生ずるためです。そして，皆で同一方向に一緒に網を入れていきます。皆が集まって網を入れるのは，一人の網では魚は両側に逃げるだけですが，たくさんの網だと魚群が混乱して網にかかる率が増えるからです。ですから，魚群を発見した船が魚を獲るとは限りません。発見船は，最初に投網する権利があり，良い場所をとれることと投網のタイミングを自分で決められるというメリットがあります。網入れのタイミングは，太陽が沈みだして赤みをおび，魚群の動きが一瞬止まった時が良いようです。

このようにして投網した網は，30分から１時間置いてから揚網します。揚網は網と魚をそのま

ま船倉に入れ，砕氷を打ち，デッキまで海水を入れます。魚が１トン以上多い時は，魚はずしに夜中までかかるので，組合に連絡して氷と人の手配をします。そして，家族だけでなく５～６人やとい，夜中までかかってタンクに水氷し，翌朝セリにかけます。アオアジの大きさは200～300gで，６２年の魚価は高値1,000円，平均600～700円で，１～３月に高値が出ます。

砂浜地帯での漁業は，海底が単調なためか魚群の定着はあまりなく，来遊した魚は素早く確実に獲らなければ次の日にはいなくなってしまいます。そのためには，どんな魚種でもすぐにとれるように準備しておくのが一番で，自然と，各種漁業許可をとり，網を買いそろえることとなります。魚具そのものも発達し，漁船も高速化し，ロランやカラー魚探など装備も発達し，資本を入れて漁獲能力を高めた者がより多くの魚を獲っているのがこの吹上浜一帯の漁業の実態ではないかと思います。アオアジ漁業にしても，船足が早く，油圧の２段式揚網機がないと実際の操業は難しく，そのために早い新船に造り替える者もおり，私にしても61年に機関換装した理由の一つはアオアジ獲りのためでした。

そして，この高度装備化には多額の資本を要し，必要な収入をあげるためには，人の倍も３倍も働かねば経営が成り立っていかないという悪循環にもおちいっています。私の場合，62年は1,500万円弱の水揚げがありましたが，1,200万円の水揚げがないと経営が成り立っていきません。そのために吾智網が終ってからアオアジ漁業に出掛けたり，ツキヒ貝漁が終わってから吾智網に出掛けたりして頑張っています。夜中の１時２時まで子供を背におんぶして魚をはずしている妻や母の姿をみてすまないと感じたこともたびたびです。

5　今後の活動計画と課題

しかし，それほど悲観的な見方をしているのでもありません。

まず，魚はいる時に獲れといいますが，私は見つけた時には一匹でも多く，寝ないででもとる元気をもっています。冒険もどんどんやります。このあいだは，アオアジがうまくいったのに気を良くして，タイを獲る刺網を江口の友人と工夫してみましたが，失敗しました。それから，アオアジ漁を通じて，他船と協力して行う仕事の大事さ難しさを知り，人との交流に気を配っているところです。

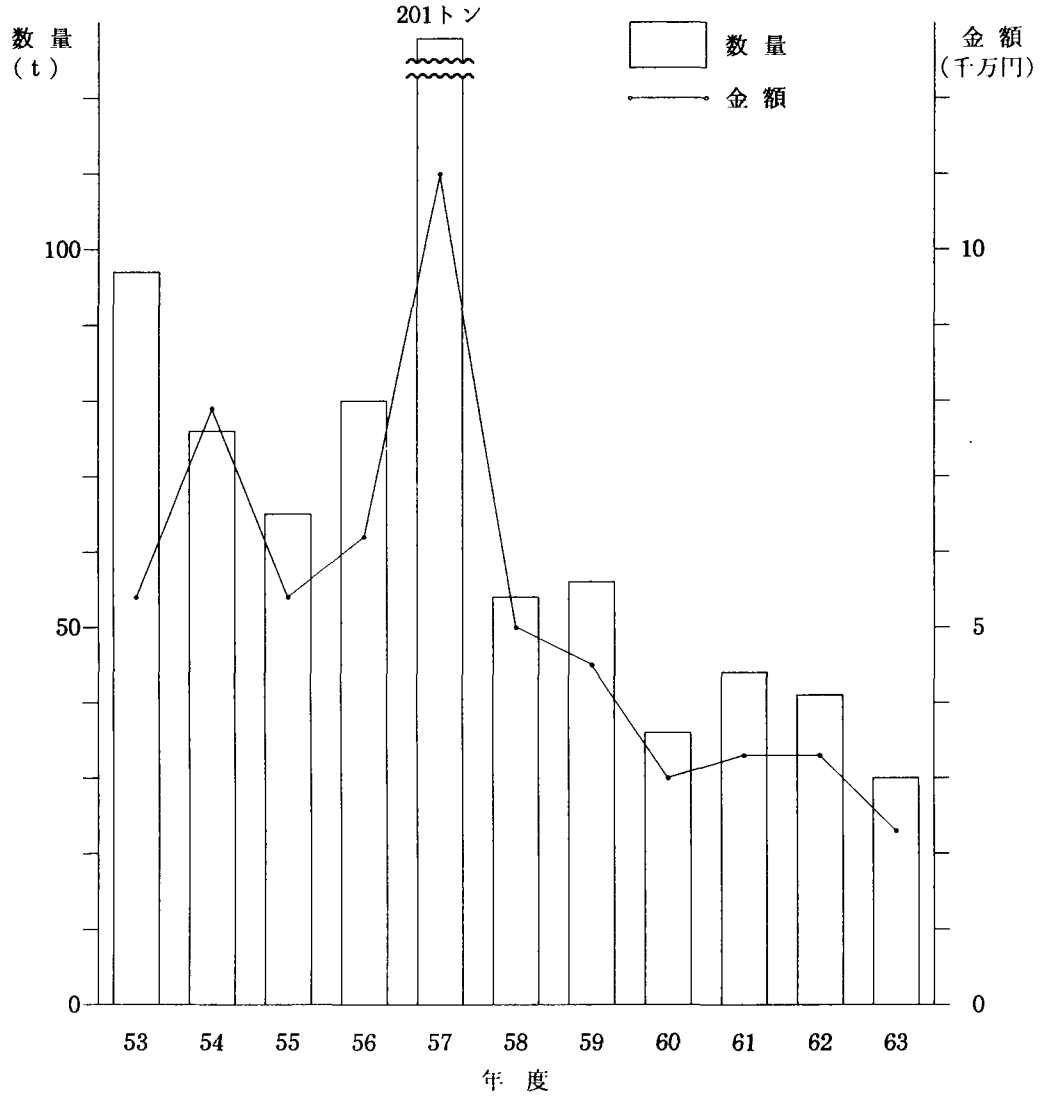
話は少し変わりますが，加世田市漁協では，堤防のそばのごく狭いイセエビ漁場で，一日一人ずつ交替で網を入れていますが，その順序はクジで決めています。解禁直後やシケの直前に当たるといいのですが，全然とれない人もいます。それでも年間200～300kgが水揚げされます。

ヒラメ刺網は，漁業権内の魚礁が一週間交替で各人にクジで割り当てられます。漁場まで競争せずにすむし，網代もかからず良いのですが，一日４～５匹も獲れれば良い方と昔ほど獲れなくなっているのが難点です。それから，共同漁業権内のウシノシタ網とイカ籠，バイ籠については，同時操業の禁止とか使用籠数の上限が自主的に決められて相互のトラブルを防止しています。イセエビにしろヒラメにしろ，量的に少ないから出来るのかもしれませんが，このようなクジによる漁場決めや操業規制は，過当な競争や設備投資をおさえる上で大きな役割をはたしていると思います。

最後に，吹上浜一帯は，沿岸は幼稚仔魚の生れ育つ場所であり，沖合は時期的な来遊魚も多い，

生産性の高い場所であります。この海を皆で話し合いながら高度により長く利用していきたいものだと考えます。そのためには，沿岸の幼稚仔魚を保護し，沖合漁場の有効利用を図るために漁場の沖合への移動が必要ですし，一方では経費削減のための協同操業など限られた資源から最大の利益を得る工夫も必要になってくると思います。このような事を，青年部の仲間達と共に考えながら頑張って行きたいと思います。

〔図１〕吾智網 漁獲量の推移

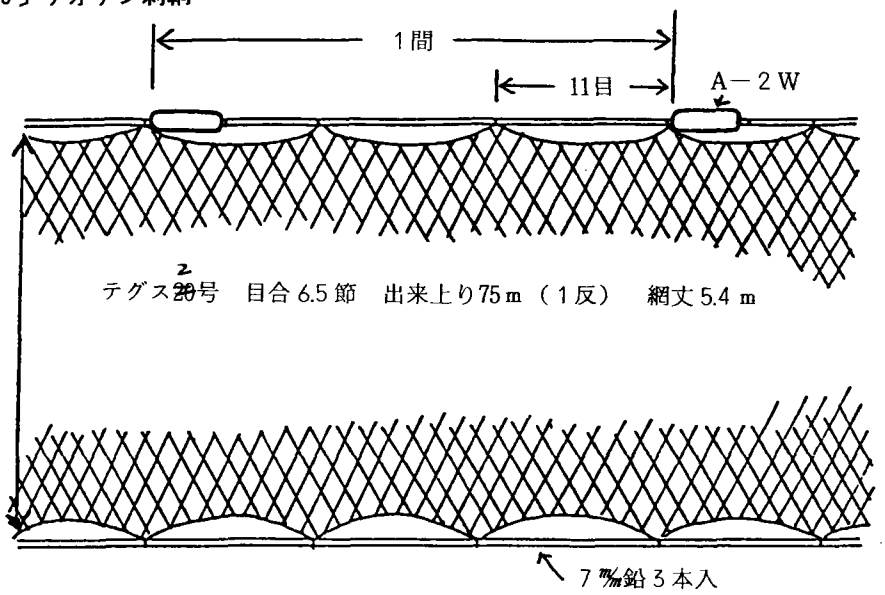


注　63年度は10月末日まで

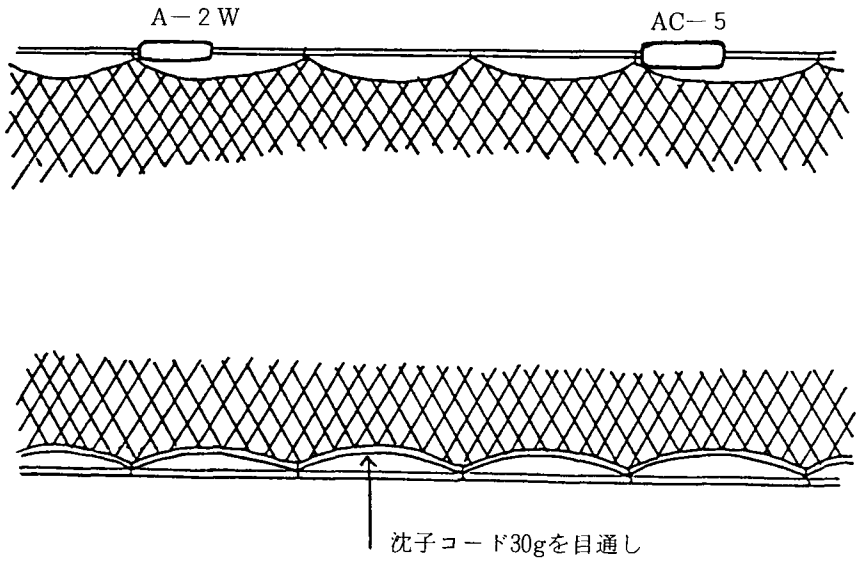
〔図２〕年間の操業形態

漁業種類＼月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	62年水揚高	操業日数
吾智網														750万円	3人
アオアジ刺網														250	2
ウシノシタ網														150	3
バショウカジキ網														50	2
ヒラメ刺網														50	3
コウイカ籠														100	3
イセエビ刺網														0	2
臨時	バカ貝													150	3
臨時	月日貝													0	2
備考		バカ貝＝62年と63年 月日貝＝63年												計 1,500万円	2人＝本人＋父 3人＝本人＋父＋母

〔図３〕アオアジ刺網

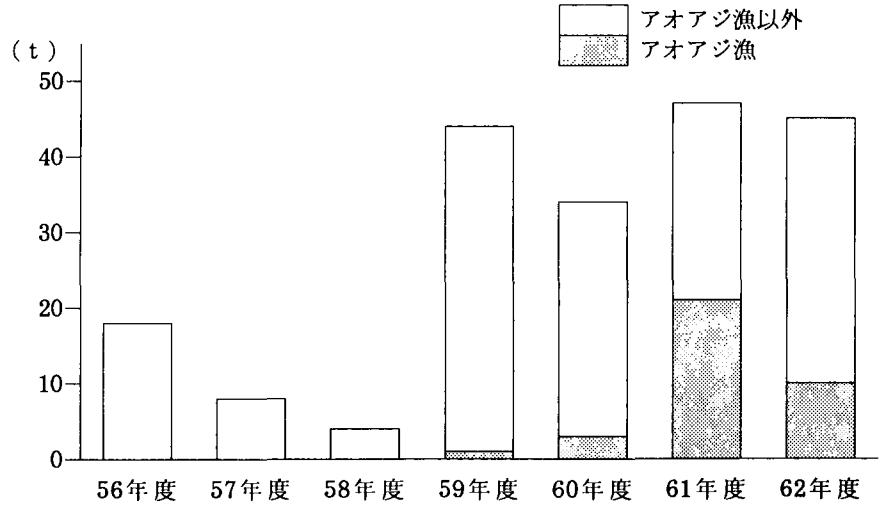


改良後

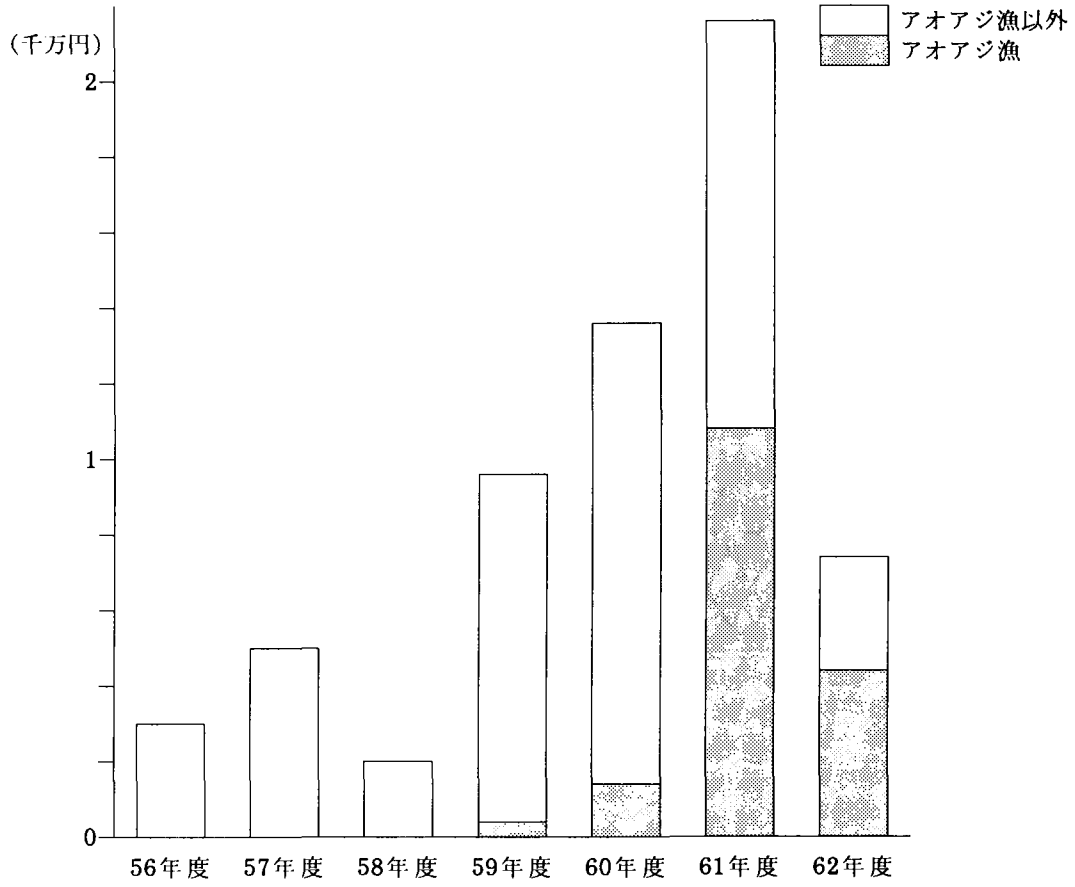


〔図4〕アオアジ漁獲数量の推移

漁獲数量からみたアオアジ漁の推移



漁獲金額からみたアオアジ漁の推移



「漁業を志して」

徳之島漁業協同組合　　作　城　三　吉

1　地域及び漁業の概況

徳之島は北緯27度43分，東経129度，大島本島の南西にあり周囲84.8キロメートル，人口32,000人余りの3町からなる島で，農業特にサトウキビが盛んに栽培されています。

私たちの徳之島漁協は，3町のうち太平洋側に面した徳之島町にあり，現在組合員数172名（正組合員57名，准組合員115名）で，瀬物一本釣りを始めとし，延縄・曳縄・刺網・潜水漁業等が営まれています。漁協水揚げは，61年度149トン・1億7,000万円，62年度146トン・1億7,300万円と順調に伸びています。特に浮魚礁における水揚げが増加しており，私たちにとって浮魚礁は重要な漁場となってきています。

2　漁業着業から現在まで

私は昭和44年徳之島高校を卒業，大阪で就職，仕事をしていましたが，考えるところがあり昭和50年Uターンしました。徳之島に戻りましてもなかなか良い仕事は見つかりません。そのようなとき，父親が半農半漁で漁船を持っていたことから，魚釣りに興味を持ち，沖に出て魚を釣るうち漁業を志すようになりました。初め父親は収入が安定しないということ等から反対していましたが，私の漁業への意志が固いことが分かりますと，「船はお前にやる。一度やれるだけやってみろ。」と言ってくれ，そして11年が過ぎました。

昭和53年に組合へ加入しました。翌54年には，徳之島漁協の荷捌き，冷凍，冷蔵施設等が，構造改善事業により完成し，釣ったこともない魚が揚げ場に並べられ，入札されていくのを見，「漁業は今からだ。いつかこんな魚を釣ってみたい。」と意欲が湧くと同時に決意を新たにしたものです。今考えてみると，良い時期に漁業を始めたものだと思います。

初めの2～3年はほとんど漁も無く，こんな調子で親子4人がいつまで飯を食っていけるのかと，頭を悩ませたものです。しかしこの頃になりますと，先輩漁師の顔と名前を覚え親しく話せるようになり，解らないことは進んで聞くようにしました。先輩漁師の方々も，私の漁業の間違いを指摘してくれ，親切に解りやすく教えてくれました。地元だけではなく他の漁協の方々とも同様で，名瀬漁協の今井丸さんからソージ釣りを勉強させて頂いた事もありました。このようにして，漁業技術を身に付ける毎に漁獲も少しづつ伸び，現在，私もどうにか漁業でやっていけるようになりました。

この10年，多くの良き先輩漁師の方々に恵まれ，本当に良かったと感謝しています。私も同様にその心意気と言いますか，後輩を育てていく心を大事に持ち続けて行きたいと思っています。

現在私は，４年前に購入した「三吉丸」（ＦＲＰ製3.4トン・70馬力）に，ロランＡ・カラー魚探・１ワット無線・自動釣り機２台・ラインホーラー１台を装備し，漁海況に応じて曳縄・一本釣り・立延縄を組み合わせて操業しています。昭和62年度の操業形態は表－１，主な漁場は図－１のとおりで，水揚げは昭和60年度950万円，61年度920万円，62年度1,050万円で，経営内容は表－２～４のとおりとなっています。

出荷先は地元漁協を主体としていますが，一部キンメ・ホタを鹿児島市場に，シビ・キハダを宮崎に出荷しています。63年度からは輸送コスト等から，シビ・キハダとも鹿児島市場出荷としています。鹿児島市場への輸送経費は，表－５のとおりで，地元漁協手数料１％を入れると，キログラム当たり100円程度の出荷経費となり，流通は離島における大きな問題となっています。

3　浮魚礁について

毎年３～５月は潮流が速く瀬物一本釣り・立延縄に不向きで，主に回遊魚を対象とした操業が行われます。徳之島漁協では２月末からシビ・カツオ・シイラが，３月末からサワラが水揚げされます。この時期市場に揚がる魚が少ないこともあって，サワラ・シイラも地元では良い値がつきます。４～６月にはキハダ・カジキ等が漁獲されます。

このようなことから浮魚礁が注目され，近年着実に浮魚礁での漁獲が増加し，優良な漁場となっています。浮魚礁における漁獲状況は図－２・３のとおりです。特に63年度は旗流し釣り漁法の導入，鮮度保持の普及とあいまって，浮魚礁の効果は大きな物となっています。今後ますますその利用が高まることから，浮魚礁のより効果的な設置，より効率的な利用方法を検討していかなければならないと思います。

4　集団操業

特に，シビ・キハダについては，以前からも鹿児島・宮崎への島外出荷をしてきましたが，私たちが送る魚は他と比べると，かなりの安値で取り引きされていました。しかし，回遊魚をより高度に活用し，少しでも瀬物資源を大切にしていくためには，シビ・キハダをもっと魅力のある対象魚種としていく必要があります。そこで仲間と話し合い，「一つは操業経費・出荷経費の軽減を図ること，一つは鮮度を良くし魚価を高めること等が必要であり，これらは集団操業を実施することである程度解決できるのではないか。」との結論になりました。そして今年度から５～６隻で集団操業を始め，具体的に次のような利点を得ることができました。

(1)　出漁時の安全性が高まった。
(2)　積み込み，出荷作業のスピードアップと労力が軽減された。
(3)　無線での情報交換により，漁場の選定が容易となり，操業経費が軽減し，また，効率的な操業により漁獲が伸びた。
(4)　共同出荷により，１隻当たりが少量でも島外出荷が可能となり，また，１隻当たりの出荷経費も軽減した。
(5)　少量出荷が可能となったため，２～３日と操業日数を短くでき，高鮮度での出荷ができた。

と言うことです。

このほかグループでは色々と勉強をし，特に「鮮度保持」については，鹿児島市場の鮮魚担当者を講師に招き学習会を行いました。そのなかで，魚価の低下の主な原因が，「マグロ特有のヤケ」にあること，また，ヤケを防ぐためには以前から行っている，1）苦悶死を避ける，2）血抜きを行う，3）内蔵等を除去する，ことに加え，4）完全なシメを行う，ことが必要で，従来のシメ方では破壊されない脊髄を破壊する必要があることが解りました。このため，早速市販のプラスチック製のトールという器具を，脊髄に魚体長の2／3程度挿入し，完全なシメを実施し，ある程度ヤケは防げるようになりました。

このように，今年から始めた集団操業や鮮度保持を図った結果，確かに魚価が上がりました。以前ですと20キロ物シビは，キロ当たり150～200円であったのが400～800円に，キハダが1,000円前後にまでなりました。今年グループ内での最高値は53キロキハダでキロ当たり1,900円，100キロカジキで1,600円余りというものでした。

5　新漁法導入

集団操業によるグループ化は，他の面でも効果がありました。勉強会等を通し情報交換が図られたこと，また，漁具・漁法の研究や新漁法の導入・定着が容易になったこと等です。昨年3月，沖縄県与那国島に視察した図－4のカジキ活餌曳縄漁法は直ぐにグループ全員に導入され，私もこの漁具でカジキを5本揚げていますし，仲間の1人は300キロ余りのクロマグロを釣り上げ，140万円で売れみんなをびっくりさせました。また，以前のシビ・キハダ漁は，図－5のジャンボ曳縄や，流し釣りが主な漁法でしたが，瀬戸内漁協の光正丸さんが宮崎から勉強され，早くから操業されていた旗流し釣りを教えて頂き，グループに導入しました。この漁法は，図－6の漁具2組を浮魚礁の潮上から流し，浮魚礁まで流れたら取り上げ，潮上りして又流すと言ったもので，ジャンボ曳縄と異なり終日操業可能で，長い漁具を曳かないため，一つの浮魚礁で多くの船が操業できる利点があります。今年のシビ・キハダの漁獲の多くはこの漁法によるものでした。

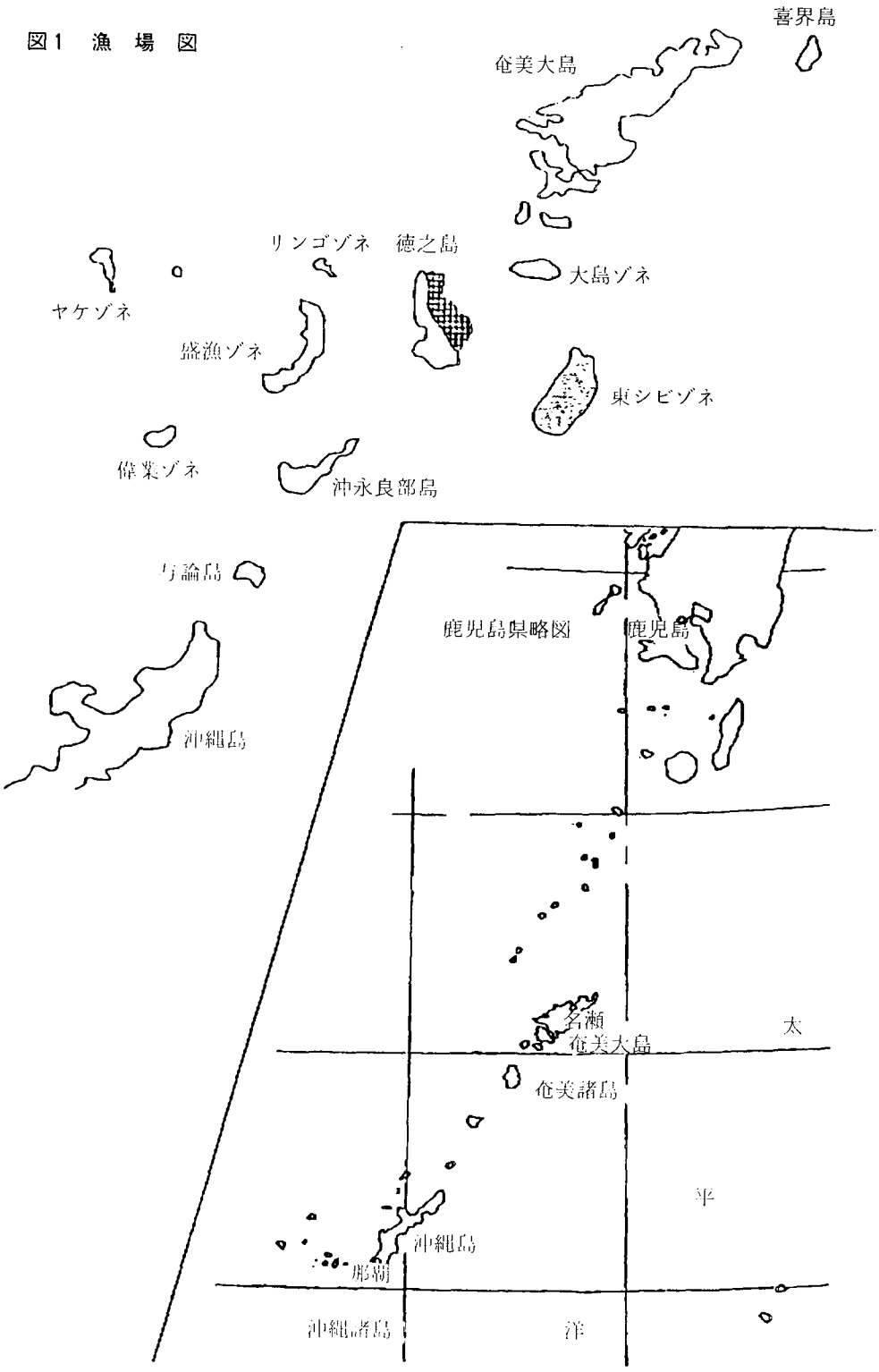
6　波及効果

私達が導入した旗流し釣りやカジキ活餌曳縄漁法が，サバニ等の小型船にも広がり，従来からのサワラだけではなく，マグロ・カジキ等対象漁獲が増え，漁業に意欲が出てきたように思います。又特に浮魚礁を利用したシビ・キハダ漁が見直され，組合せの漁法に幅ができ，漁家経営の安定に役立ちました。

7　おわりに

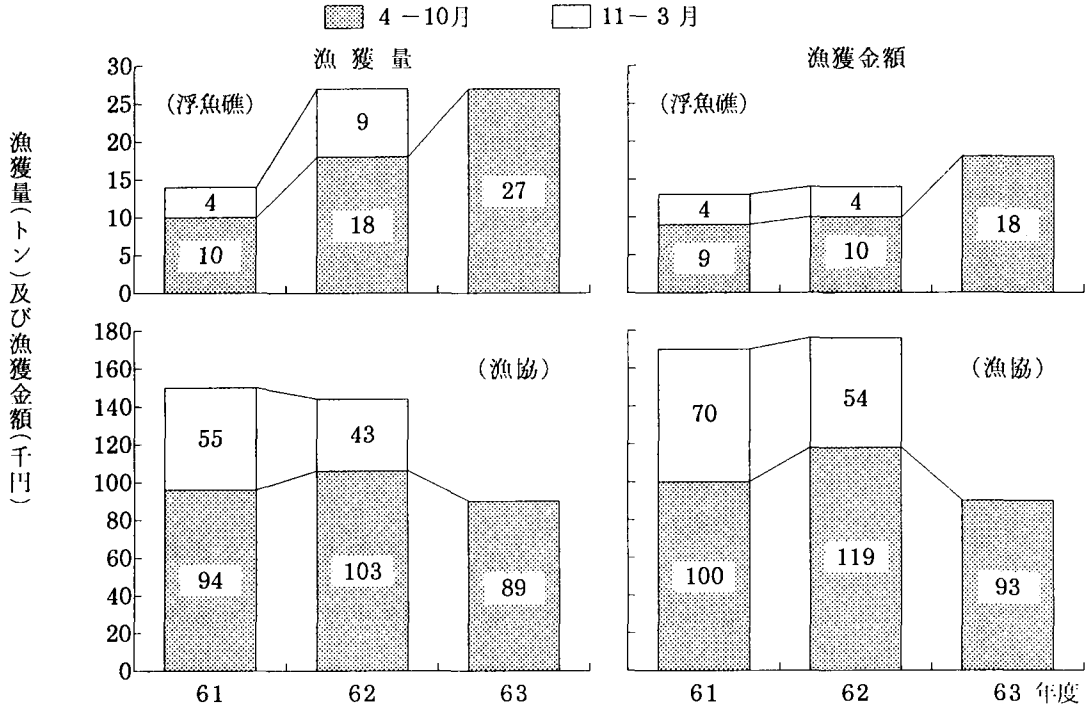
皆様にとって，特に若い人たちにとって「魅力ある漁業は，」といえば，まず「儲かる漁業だ，」ということだと思います。漁業後継者を育て，地域の水産業を維持発展させるためには，まず私達中堅漁業者が，安定した高収入を得る姿を示すことが第一だと思います。現在奄美における水産業は，特に瀬物資源の減少等，様々な不安材料を抱えています。しかし，浮魚礁の効果的設置・利用や，新漁法の導入により，浮魚資源を高度に活用すれば，瀬物類での減収を補って余りあるものと思います。若い人と共々これからも頑張って行きたいと思っています。

図1　漁　場　図


喜界島
奄美大島
リンゴゾネ
徳之島
大島ゾネ
ヤケゾネ
盛漁ゾネ
東シビゾネ
偉業ゾネ
沖永良部島
与論島
鹿児島県略図
鹿児島
沖縄島
名瀬
奄美大島
太
奄美諸島
平
沖縄島
那覇
沖縄諸島
洋

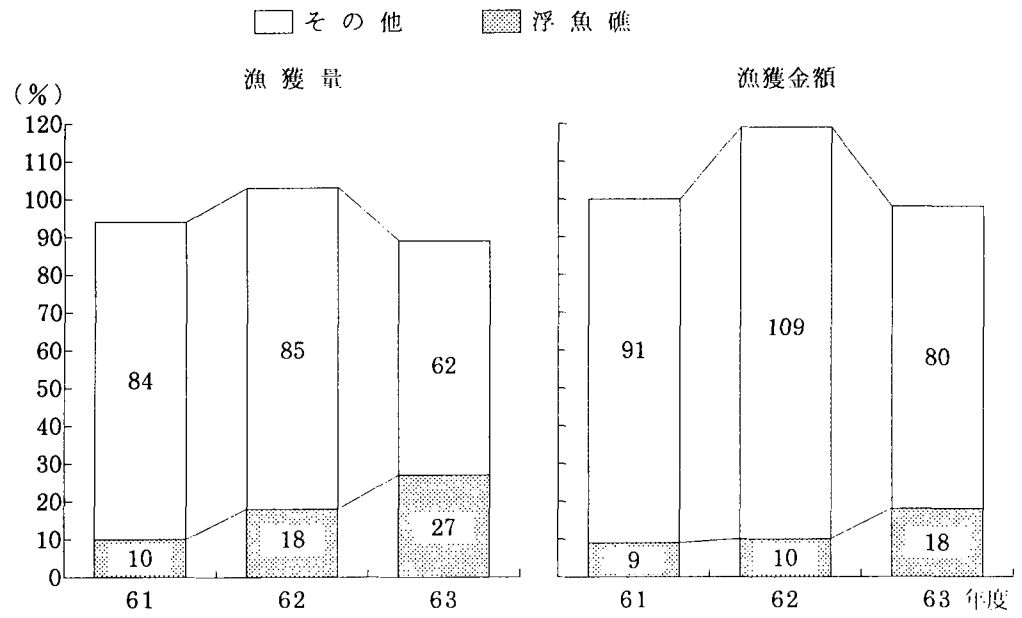
図－２　浮魚礁における漁獲量と漁獲金額の推移

数値は，漁獲量（トン）・漁獲金額（千円）

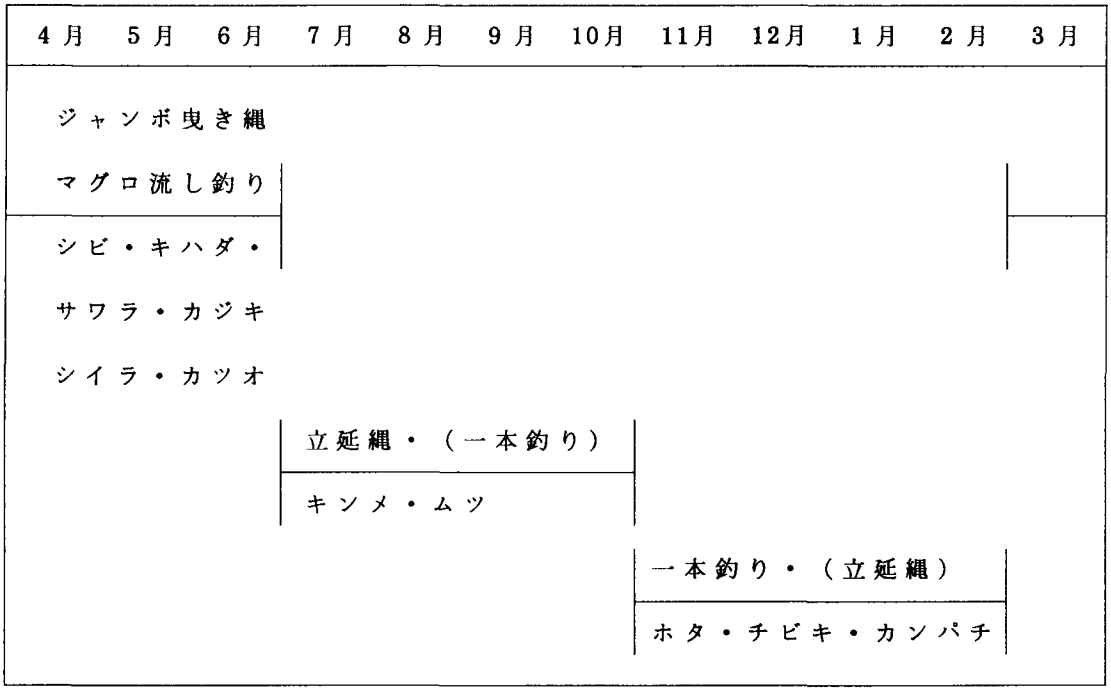


図－３　４～10月の漁獲量・漁獲金額における浮魚礁の構成比立（％）

数値は，漁獲量（トン）・漁獲金額（千円）



表－1　三吉丸の昭和62年度主な漁業組合せ状況



表－2　三吉丸の昭和62年度水揚げ実績

単位：kg・千円

出荷先		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
地元	数量	749	683	442	206	218	453	328	664	515	177	294	521	5,250
	金額	542	185	204	305	321	393	367	682	878	292	404	640	5,213
鹿児島	数量	178		106	1,682	773	312	37						3,088
	金額	111		37	2,802	1,312	474	58						4,794
宮崎	数量		484	441										925
	金額		253	266										519
月計	数量	927	1,167	989	1,888	991	765	365	664	515	177	294	521	9,263
	金額	653	438	507	3,107	1,633	867	425	682	878	292	404	640	10,526

＊鹿児島出荷：キンメ・ホタ
＊宮崎出荷：シビ・キハダ

表－3　三吉丸の昭和62年度経営状況

漁業種類	主な魚種	水揚げ量	水揚げ金額	手数料	大仲経費	漁船修理費	漁船消耗品費	粗収益	操業日数	備考
		トン	千円	千円	千円	千円	千円	千円	日	
ジャンボ曳き縄流し釣り	キハダ・シビ	4.6	2,238	119	826	34	45	1,214	64	
立延縄	キンメ	4.0	6,032	348	1,239	90	122	4,233	94	
瀬物一本釣り	ホタ・チビキ	1.7	2,256	113	631	34	45	1,433	60	
計		10.3	10,526	580	2,696	158	212	6,880	218	

表－4　三吉丸の昭和62年度大仲経費

単位：千円

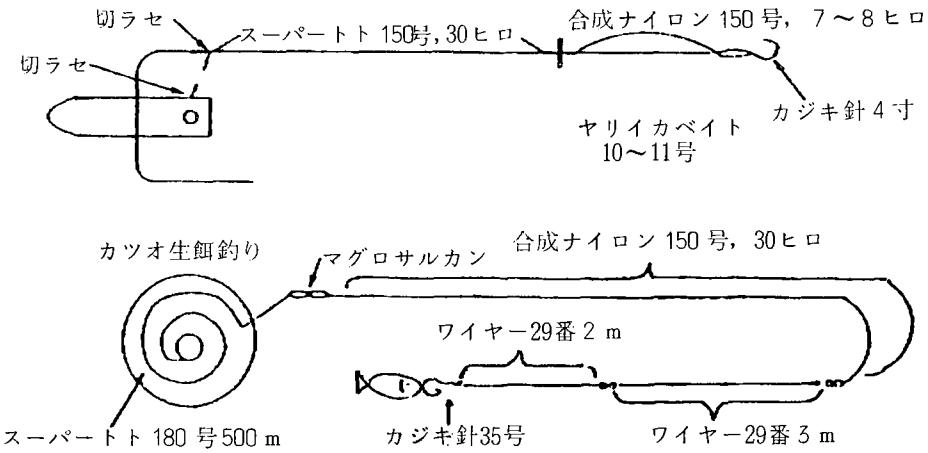
漁業種類	燃料費	食料費	氷代	餌料代	漁具代	運賃	魚函代	計	備考
ジャンボ曳き縄流し釣り	174	51	131	128	283	59		826	
立延縄	120	61	184	261	406	131	76	1,239	
瀬物一本釣り	157	54	65	127	228			631	
計	451	166	380	516	917	190	76	2,696	

表－5　昭和62年度鹿児島市場出荷経費内訳（最大出荷例）

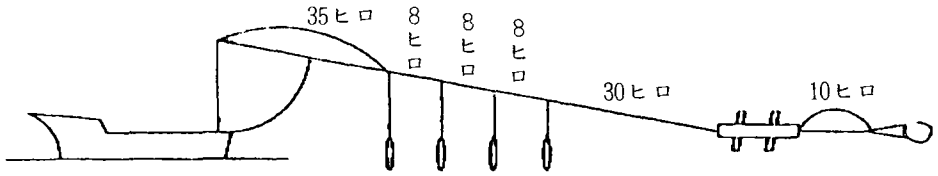
魚種	出荷量	コンテナ運賃	空コンテナ返送賃	魚函代	氷代	出荷経費計	kg当たり出荷経費	漁連手数料	地元漁協手数料
キンメ	250kg	9,400円	3,540円	5,490円	3,000円	21,430円	85円72銭	5％	1％

＊手数料は出荷経費に含まず。
＊使用魚函はＳ－200：12ケ・ＹＣ－12：10ケ

図－4　カジキ釣りの漁具図



図－5　ジャボ曳き縄漁具図

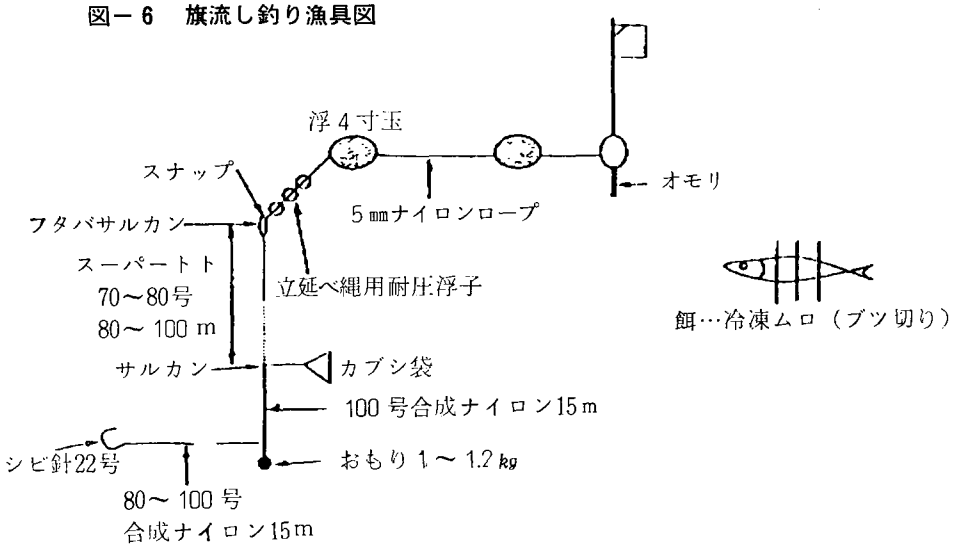


ミ チ 糸200 号　合成ナイロンテグス

枝　　糸150 号　　〃

ヤリイカ　8 号

図－6　旗流し釣り漁具図



「後継者として魚類養殖に取組んで」

高山町漁協青壮年部　谷山　豊

1　地域及び漁業の概要

私達の高山町は，志布志湾の南西部にあり，海岸線は約８kmで磯は，岩礁に富み，黒潮の大隅分岐流，日向冷水や肝付川などの影響を受けて，好漁場になっています。

また，昭和58年には，石油備蓄基地建設に伴って共同漁業権が放棄され，漁場が狭くなっています。

その中に，大小19統の定置網が設置され，アジ，イワシなど多くの魚種が入り，地区の水揚げの大半を占めています。

その他，ハマチ，トラフグなどの魚類養殖，磯建網，籠網等が操業されています。

ここ数年の漁協の水揚状況は，別表で見るとおり，数量，金額とも不安定になっています。

2　青壮年部の組織と概要

昭和53年に漁協青壮年部として発足，各業種の50才未満の部員41人で構成され，放流事業，奉仕活動及び学習会などを実施しています。

昭和61年７月に，漁場放棄に伴う漁業補償金を積立て，「高山町漁協水産振興基金」が設立され，水産振興のための事業などが実施されていますが青壮年部も，これに協力することになっています。

3　養殖業者会の組織と概要

養殖業者会は，会員13人で，養殖魚種は，ハマチ，カンパチ，定置網に入るトラフグなどです。

養殖規模は零細で，いけす台数が平均５台，従事者も１～２人です。

２か月に１回位の割合で業者会を開催して，養殖計画，種苗配布などの協議や学習会を行い，また，養殖けい留施設のカキ落しなどの維持管理にあたっています。

4　就業までの経緯

私は，昭和52年水産高校を卒業後，オーストラリアに養殖場を持つ真珠会社に就職しました。

業務は現地人の技術指導ということで，一通りの技術を身につけ，渡航寸前というところで，高校時代に痛めた腰痛が再発したため，退社，帰郷しました。

その後，地元の砂利会社に５年程勤めましたが，思いどおりの仕事ができず，また，養殖に魅

力を感じていたため退社しました。

家に帰って，ます網と養殖をやっていた両親に，私も養殖をやりたいと相談したのですが，「今の経営ではメシは食っていげない。」と，反対されました。

私としては，２つの民間企業で働いて，自分の納得できる仕事をするには，自分で事業をやるしかないと考えていましたので，何とか説得してようやく，養殖を１人でやっていくことで了解を取り付けました。

以前から，海に出て網揚げなどの手伝いをしていましたので，とりあえず，みようみまねでスタートしました。

それ以来，まず両親とます網を揚げた後に，養殖場に行っています。

5　魚類養殖について

当地の養殖場は，湾内とは言え（別図），風や波の影響が強く，昭和58年に漁協が共同けい留施設を設置してから，ようやく形ができたばかりです。

その生産額も，別表のように僅かです。

私の場合は，61年にハマチ，カンパチ主体で引継ぎましたが，経営状況は別図でご覧のように，２年間の平均で，粗利益が約180万円と満足できるものではありません。

63年の養殖数は，いけす６台で，ハマチ１年もの6,000尾，２年もの3,300尾，カンパチ2,000尾，トラフグ930尾と若干の雑魚です。

カンパチは，ハマチと混養していますが，ハマチのような食欲がないため，成長が悪いようです。

トラフグは，４～６月に250～300ｇ位のものが，主に自営定置網に入り，これを１尾700円で購入しています。

トラフグ養殖は，60年に始まり，現在10人が手がけています。

私は，61年510尾，62年4,550尾，63年930尾入れ，61年約500尾（歩留98％），62年約3,900尾（85％）と割に成績がよかったのですが，今年は，500尾足らず（50％）になっています。

62年は，10人のうち歩留50％以上か２人だけで，あとは20～30％でした。

トラフグ種苗は，定置の従業員が下歯を切り，１週間ずつまとめて業者に渡していましたが，63年からは健全な種苗を確保するため，業者会が漁協と協議して，部員が毎朝交代で作業に立合い，その場で種苗を受取って，エルバージュとホルマリンで薬浴もすることにしました。

今年は，トラフグの入網が少なく，１日で50～70尾位で，全体で10,000尾に達していませんが，歩留りは60～70％と，かなりよくなっているようです。

漁協では，今年の５月に２統の定置のうちの１統を大型化し，網船も全長24ｍの大型船にしました。前からすると網揚げの位置が高くなり，魚のたまり場も狭くなっています。たまたま私の番だったのですが，その日は，一度に300尾が入り，取揚げに時間がかかり，スレもひどかったようです。その時入れた種苗が全滅したため，歩留りも落ちています。

餌付けについては，イワシ，イカナゴなどをミンチにして少しずつ与え，一通り行渡ったところで，凍結エサを吊しておきます。

7月からは，ペレットに切換えますが，7～8月の高水温期には控え目にして，9月に入って水温が下がりだしてからは，短時間にタップリ食わせて，適当に吊りエサをしておきます。11月から12月にかけて水温が20° Cを切るようになると食いも悪くなり，油断するとやせてきます。

出荷のために，いけすの中の一部だけを取り出すと，残ったものは警戒して，浮き上って来なくなります。

61年は，11月に1.3kgになりキロ6,000円で販売しましたが，62年は，一部を出荷したため12月からやせ始め，12月に0.8kg（4,112円），1月0.7kg（3,840円）と目減りしてしまいました。

62年から，下関へ出荷していますが，輸送が長時間になるため，目切れやへい死が多く，輸送方法を考えてもらうか，出荷先などの検討が必要だと考えています。

6　今後の課題と計画

今まで，1トン足らずの餌船を使っていましたが，今年の11月に約8トンの餌船をペレッターと投餌機をつけて購入しました。これからは，充分な管理ができるものと期待しています。

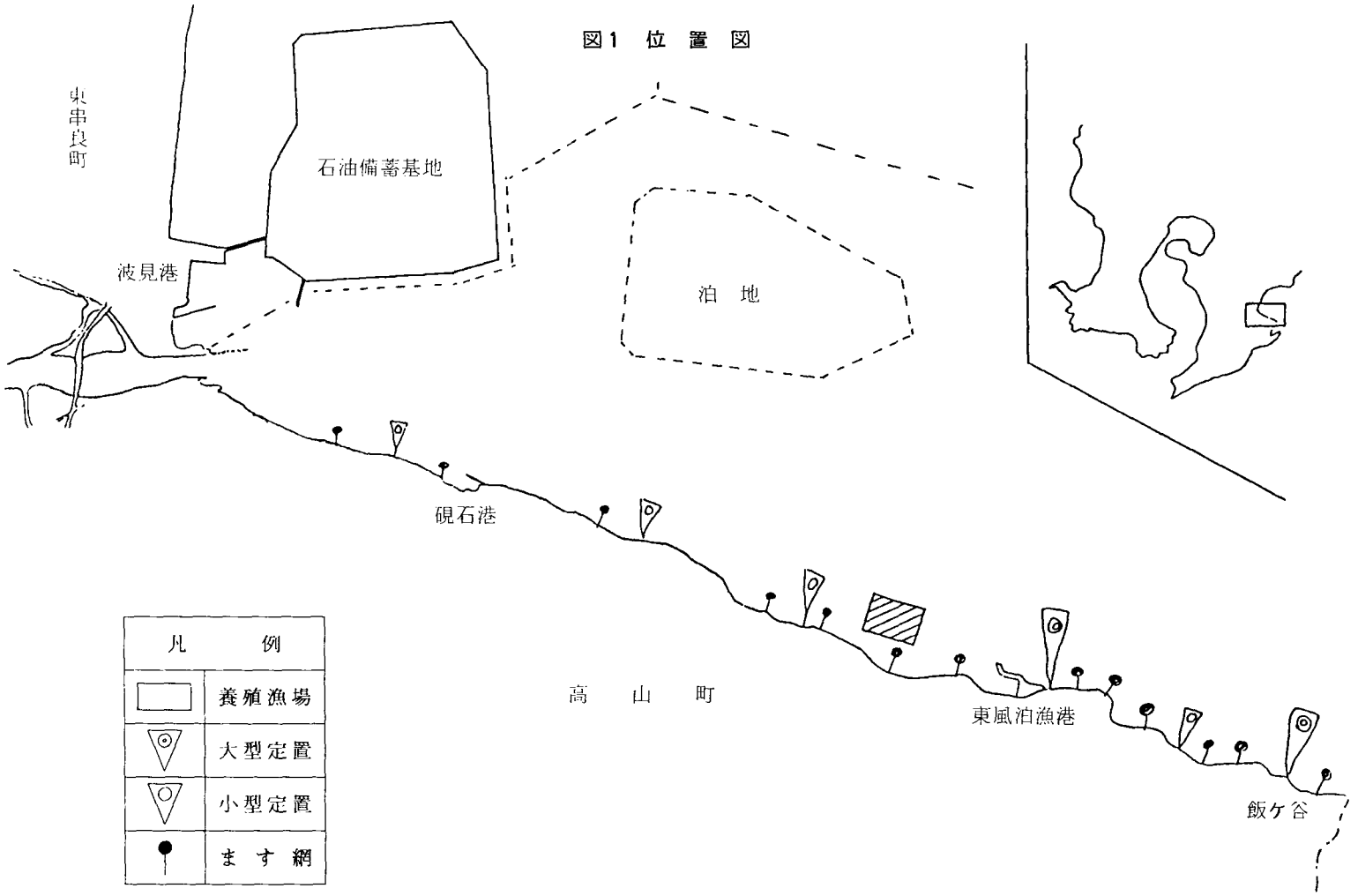
今後も，ハマチ，トラフグを主体に考えていますが，毎年，定置網に入るスギを2～3尾入れていますが，成長が早く，半年で5kg以上になります。販売価格もキロ1,500～1,600円しますので，このような効率のよい魚種の開発を是非お願いしたいと思います。

また，台風が心配ですので，沈下式いけすの導入も考えています。

私達は，冷蔵庫等の施設や資金などで，全面的に漁協にバックアップされています。町でも62年から新しい資金制度ができました。このように，関係機関の支援がないと，経営は成り立っていきません。

今後さらに，業者会の結束を固めて，関係機関との連携を強めて参りたいと考えていますので，皆様方の御支援，御協力をお願い申し上げます。

図1　位　置　図

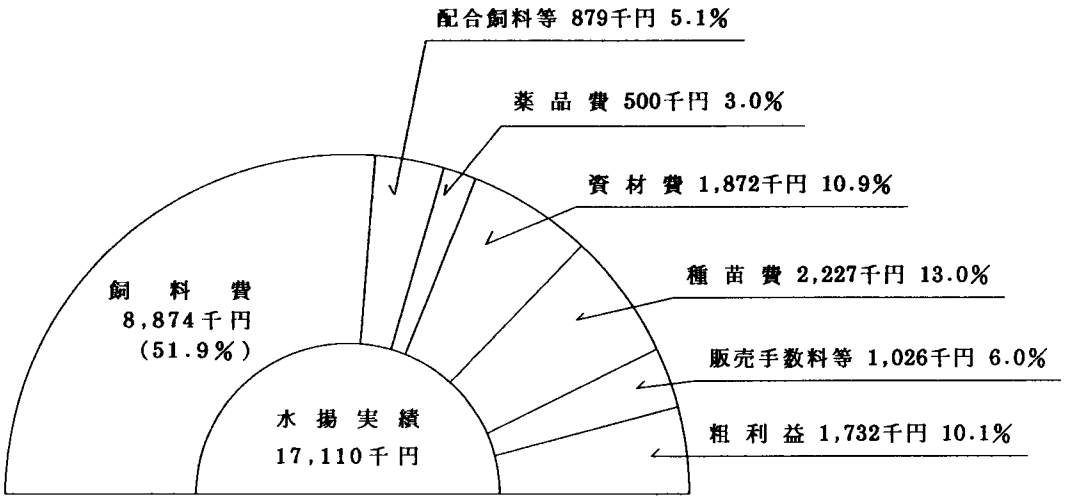


別表　高山町漁協水揚高の推移

（単位：トン，千円）

	58	59	60	61	62
小型定置	285 68,187	154 47,249	74 37,038	94 42,777	115 47,943
ます網	68 32,799	60 35,950	52 33,306	56 36,450	71 38,049
養殖	41 40,262	59 69,453	86 131,272	131 167,071	70 92,360
刺網・籠網	15 13,199	12 10,858	12 11,288	15 12,631	15 19,420
漁協自営大型定置	468 87,038	260 137,859	309 79,889	478 125,489	634 129,196
その他	7 4,841	34 28,532	59 27,557	54 29,086	5 4,310
合計	884 246,326	579 329,901	592 320,350	828 413,504	910 331,278

図2　収　支　状　況（61.62年2ケ年平均）



地域おこしの一端を担って

黒之浜漁協青年部　福留建三

私が住む阿久根市黒之浜は阿久根市の北西部に位置し，以前は本土から長島を経由して天草方面へ渡る渡船場として賑いましたが，昭和49年，黒之瀬戸大橋が開通した後は，純漁村として静かなたたずまいを見せた集落となっております。目の前を日本の三大急流の一つに数えられる黒之瀬戸が流れ，豊かな海の幸をもたらしております。

黒之浜漁協は，正組合員267名，准組合員139名計406名の組合で，中型まき網，棒受網，ごち網，磯建網，潜水業等，いろんな漁業種類があり，地元市場販売取扱高は4億円前後で，他に他港水揚げが約15億円ほどあります。

私は，中学時代から父の手伝いをして沖に出ておりましたので，漁業が天職と思っておりました。そこで学校を終えるとすぐにまき網漁業に従事しましたが，昭和51年，18才の時独立して父親と二人で棒受網の経営に乗り出しました。乗組員を三人頼んで五人で出漁しましたが，船は3トン，26馬力で規模も小さく，技術も未熟でなかなか人並みの水揚げにには至りませんでした。そこで，昭和53年に5トン，35PSの中古船を購入し，規模拡大を図りましたが，これでも船足が遅く，まもなく，90ＰＳへと機関換装をしました。しかし，それでも思うような操業ができず，意を決して，昭和54年，福心丸9.8トン90PSの新船を建造し，さらに昭和59年に120PSの機関換装をして現在に至っております。

棒受網は，季節とともに回遊してくる浮魚を漁獲対象としております。回遊してくる魚種はその年によって多少，異なりますがおおむね図2のようになっております。春先にはキビナゴ，タレ，ヤリイカ，夏から秋場を通してマイワシ，ウルメイワシ，ソーダガツオ，冬場はキビナゴ，タレとなっております。最盛期は6～9月の夏場ですが，時期によっては思わぬ豊漁をすることがあります。

長年，棒受網をやっておりますと，いろんなことがあります。今年の夏は，今まで見たこともない2～3cmほどの小さなカニが異常発生して私たちの目を驚かせました。古老の漁業者に尋ねると「今まで見たこともない」と言う返事でした。水産試験場にたずねたところ，オヨギピンノ（図3）という名前のカニとわかりました。図鑑によれば大豊漁の兆しになると言い伝えがあるとのことです。何が大豊漁なのか，はたして言い伝えどうりなのかと心待ちにしておりましたが，今のところそれらしい兆しはなく夢がしぼみかけているところです。せめて，このカニが少しでもお金になるカニであれば，ちょっとしたボーナスになったのにと恨めしく思ったものでした。

黒之浜漁協の棒受網船は現在13統おり，ここ5ケ年間の水揚げの推移をみますと，図4のとおり

で，数量的には増加傾向にありますが，金額的にはほぼ横バイの１億５千万円前後です。これは，以前は値段のよいウルメイワシの比率が高く，量が少なくてもある程度，金額が上ったのですが最近は，値段が安いソーダガツオが多くなったためと思われます。

漁獲した魚は阿久根市漁協の市場に水揚げしますが，水揚げのほとんどは市内の加工業者に引きとられます。市内にはおよそ50軒の加工業者がおり加工の少ない地区では，単なる大衆魚の小魚にすぎないイワシ等ですが，加工業の盛んな阿久根では貴重な加工原料と言うことになります。15年ほど前まではイワシなど１箱700～800円くらいで引き取られていましたが，今では加工向けには高価で１箱3,000円ぐらいウルメイワシに至っては１箱1,000～2,000円ぐらいだったものが，最近では時期によって，１箱20,000円を越える高値をつけることもあります。

加工向けとは言っても，鮮度の差が魚価を大きく左右します。何よりも気をつかうのは魚を魚槽に入れる時です。網の中に入った魚を船に積める状態まで網をしぼりますが，その際，魚が過密になると死んでしまい鮮度を悪くしますので，ある程度魚が泳ぐことができる程度にしぼります。そして，生きている状態で十分，氷のきいた魚槽の中に積み込めるよう，とり入れ方もローラー等を利用してすばやく行うようにしています。

また網については，一回の入網でたくさんの漁獲があげられるよう今までのものより，網の奥行が深くなるよう反数を増やしました。

そのほかにも，上潮と下潮が逆に流れる時など網が破れることがあるのですが，これを防ぐため，上網下網との連結部に太い糸の網地を多めに入れることで破れを少なくする工夫をしております。

最初のころの省略機器と言えばイカリローラーぐらいでしたが，最近ではほとんどの船がネットローラーやサイドローラーをつけ，また張棒も孟宗竹から軽合金の棒にかわり，折れる心配がなくなりました。また。魚探やロラン・レーダー等，近代的な漁撈，航海計器の装備により効率的な操業ができるようになりました。

このように15年前は，人手を要しておりましたが，現在は装備の近代化，省力化のおかげで少人数で操業できるようになり，操業時間もずいぶん短縮されました。

こう申しますと，今までずっと一見順風満帆のようでありましたが，本当は不安と摸索の連続でした。若いうちは他人を使うにも，いろいろ気を使いましたし，また，漁がない時など，今月の手当をどうしようかと考えながら舵をとることもたびたびありました。十余年にわたる努力の結果やっと管内同業者の平均的な水揚げをすることができるようになったというしだいです。

このようにして，どうにか，私の経営も軌道に乗ってきました。しかし，現在の漁業は大変厳しく，後継者不足，冬場における漁閑期対策などさまざまの問題があります。まわりを見まわしますと，各地に漁協青年部があり活動しておりました。漁業に従事している若者が集り，漁業における知識と技術を習得し，漁業の近代化，安定化，生産性の向上等により，地域の漁業を魅力ある産業にするという目的に活動していることを知りました。私一人が問題を持っているわけではありません。そこで組合を通じ，同世代の若者に青年部組織をつくることを呼びかけました。新しい漁具・漁法の開発，後継者の育成，地域おこし等目的はいろいろです。私の呼びかけに13名の漁業後継者が応えてくれて，昭和60年４月，ここに黒之浜漁協青年部として組織発足することができました。現在，部員は16名，従事している漁業は棒受網，磯建網，延縄，潜水業，まき網等で運営は会費の

他に助成金や事業収入等でまかなっております。

ここで青年部の活動について触れてみたいと思います，発足当初は，何か活動の核になるものをと言うことで赤ウニの蓄養試験に取り組みました。これは身入りの悪い海域に棲息する赤ウニを採捕して籠に収容し，海藻を与えて，身入りをよくしようとするものです。約3ケ月の間，部員が三名づつで組を作って3日おきに交替で餌当番をしました。餌は，カジメやアオサ等を潜ってとってきて籠に入れました。仕事の合い間をみて当番をこなすのですから，なかなか大変でしたが，青年部の結束を固める活動として重要な事業でした。3ケ月後，そのウニの売上げは青年部の活動資金に組み込むこともできました。

阿久根市では，毎年，後継者育成の一環とて市内の中学生を対象に，水産教室が開かれ，夏休みを利用した宿泊合宿で教室が始まります。私もその第9期の修了生です。その中には，手旗信号やロープの結索，網地の修理等の時間があります。そこで部員が，阿久根市漁協青年部員と協力して，中学生の講師として出かけていき，教えております。夏の暑い日，夜の仕事を終えての協力は大変ねむいのですが，私たちの後を継いでくれる子供たちに教えることは何ものにもかえがたい充実感をおぼえます。

黒之浜部落は約280戸ほどの集落ですが，これほどの部落に村をあげての祭りがないのは寂しいことです。今は時代の流れか，皆の時間の過し方がそれぞれバラバラになって，コミュニケーションの場も少なくなってきております。そこで昔あった盆おどりを復活させたいと青年部で計画を練り，取り組みました。盆おどりの舞台をつくり，カラオケ大会も併せて催し，部落の人はもとより，帰省してきた人たちからも大変喜ばれています。

私たちは，自分たちの活動の幅を拡げるたる阿久根市青年連合会や県の漁青連へも加入しました。その年の8月，阿久根市夏祭りで行われた綱引き大会において優勝しまたベーロン大会にも毎年参加し，いつも上位で活躍しております。その他県漁青連が主催するソフトボール大会にも参加しました。

最近，獲る漁業からつくり育てる漁業が全国で唱えられておりますが，私ども水イカ資源の増大をはかるため，漁協の助成によりイカシバ投入を行いました。後日，潜水追跡調査をしたところ，イカシバにすき間なく生みつけられた卵を見て，努力がむくわれたと感激しました。

先に述べました水産教室では，人に教える立場でしたが，自分自身の研修も大切です。そこで県の漁業研修所が開講する水産技術研修大学講座を青年部そろって受講し，藻場造成や魚礁の話などを大変興味深く学ぶことができました。

また私たちの最も重要な課題である冬場の漁閑期対策と新規漁法の収得と言う目的で，機会をみては先進地研修を実施しております。漁船漁業部門では，五島のつり落し漁法やサバフグすくい網の乗船研修，養殖部門では，佐賀県のウニ養殖や知覧町のクルマエビ養殖を研修しております。

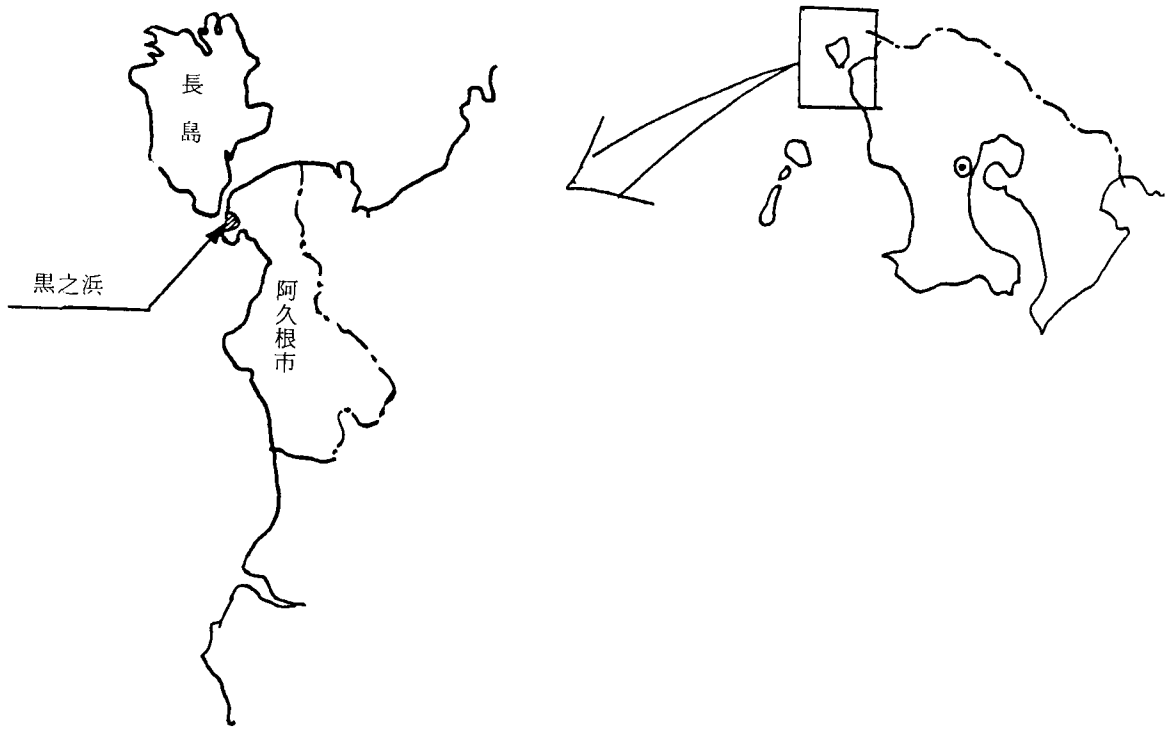
このような私たちの活動も少しずつ地区民に認められ，その存在を知られるところとなり，放流事業のほとんどは青年部の重要な任務となっており，本年度もコウライセエビやガザミの放流を実施しました。また部落においては，エビス祭の協力や金比羅神社の管理をまかされるようになりました。

青年部活動をはじめて来年で5年目を迎えます。私は結成当初より現在も部長をつとめ本年度，

青年漁業士の称号を与えられました。青年部結成当所は何から手をつけてよいのか，はたして部員がついてきてくれるのかなど，やらなければと言う気持より，不安でいっぱいでした。しかし，どのような計画に対しても部員一人一人は，顔一つしかめず協力しあっています。これからの漁業を考える上で頼もしいかぎりです。

今後とも地域の期待にこたえられるよう，皆んなの楽しみにしている盆おどりを，地域のコミュニケーションの場となるよう継続しながら，漁閑期対策としての新規漁法の研修等に努め，地域の活性化と発展のために部員とともにささやかな行動を続けていきたいと思います。今後共，関係諸機関または皆様方の御指導，御鞭撻の程よろしくお願いいたします。

図－1　阿久根市黒之浜の位置

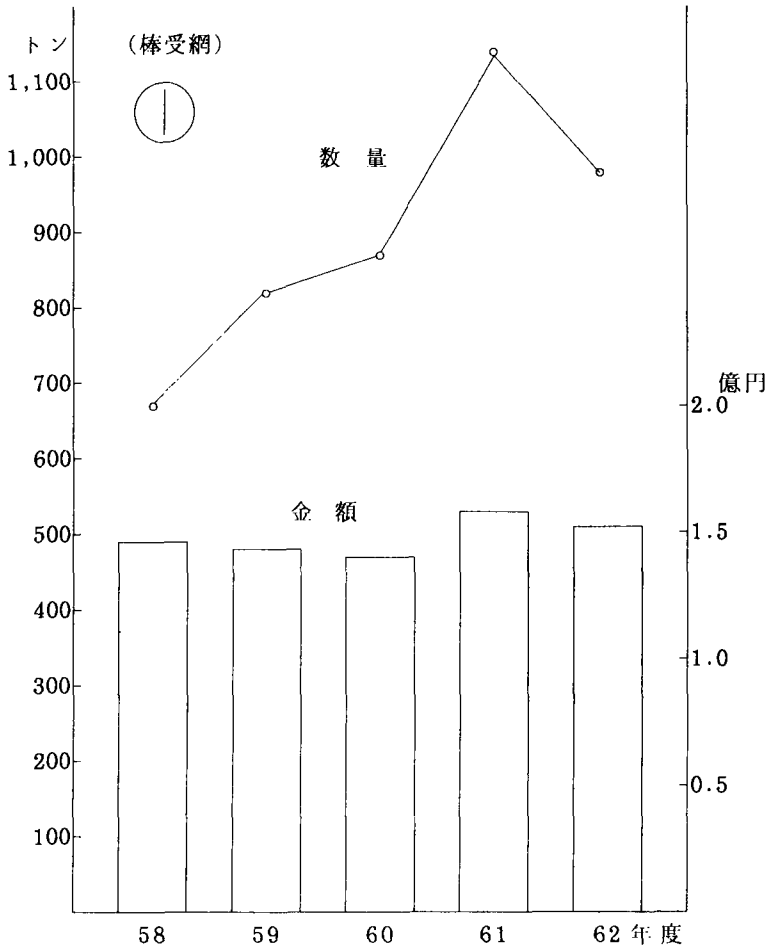


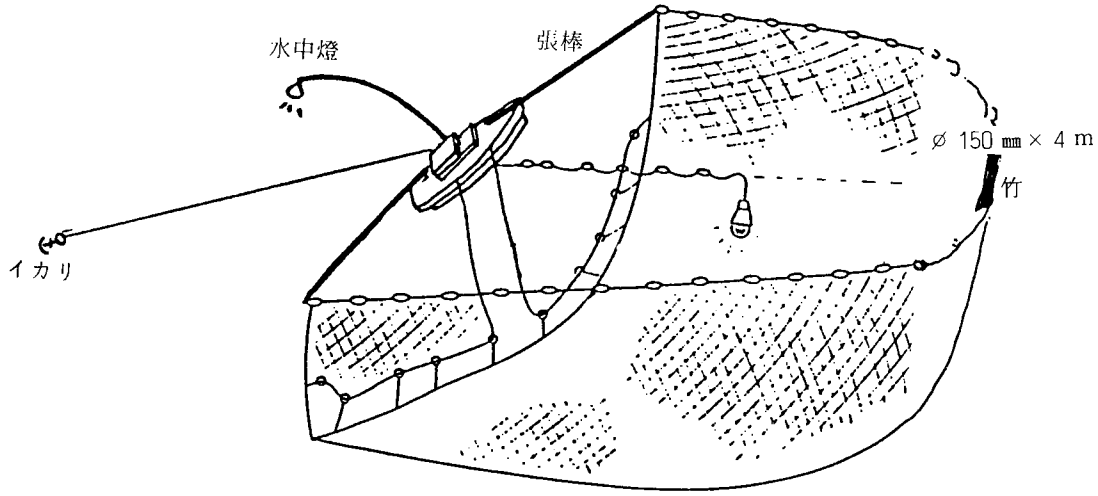
図－2　洄遊魚種の周年変化

魚種＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
キビナゴ	■	■	■							■	■	■
カタクチイワシ	■	■	■	■	■	■						
ヤリイカ		■	■									
マイワシ					■	■	■	■	■	■		
ウルメイワシ							■	■	■	■		
ソーダカツオ										■	■	■

図－3　オヨギピンノ

図－4　棒受網の水揚推移





棒受網漁業操業図

昭和62年度事業報告書

自　昭和62年 4 月 1日
至　昭和63年 3 月31日

主要活動事業

年月日	実施事項	実施内容	場所
62 4	役員会	年間計画について	漁協研修室
14	通常総会	61年度事業報告（収支決算の承認）	〃
		62年度事業計画（収支予算の承認）	〃
26	イカシバ投入	ダマ，八郷前，ハマガタ投入	〃
5	役員会	追跡調査について	漁協研修室
6	役員会	盆踊り，カラオケ大会の日程について	会長宅
	県漁青連総会	会長参加	水産会館
	市青連球技大会	ソフトボール	総合グランド
28	イカシバ写真	イカシバの産卵状態の確認	
7	役員室	水産教室の人員割り，その他	会長宅
	市水産教室	手旗信号の指導，ロープの結索，網の修理，その他修理	B＆Gセンター
8	市，夏祭	ベーロン，綱引き参加	新港一帯
15	盆踊り，カラオケ大会	盆踊り，カラオケ，ビール＆ジュース早飲み大会，すいか割り	消防格納庫前
9	県球技大会	ソフトボール大会	桜島グランド
	研修	五島（3人）	
10	フグすくい網の研修	五島のフグすくい網の研修	漁協研修室
11	エビス祭り	旗立て	金比羅山

年 月 日	実 施 事 項	実 施 内 容	場 所
12	忘 年 会 金 比 羅 山	 旗立て，しめなわづくり	
63 1	役 員 会	港内清掃について	会 長 宅
2	北薩地区漁村青年協議会総会	交流を深める為，通常総会	阿 久 根 漁 協
	役 員 会	62年度の活動について	会 長 宅
3	役 員 会	62年度収支決算について	会 長 宅

私達の婦人部活動
－漁村婦人の役割を考えて－

東町漁協婦人部　浜島明野

1　地域と漁業の概況

私達の東町は，鹿児島県の最北端，雲仙天草国立公園の一角に位置し，長島本島を初め伊唐，諸浦，獅子島等，大小18の島々で構成された風光明媚な町です。

町の人口は約8,500人で農業と漁業を基幹産業としていますが，昭和49年に九州本土と結ぶ黒之瀬戸大橋が開通すると町の産業も急速に発展してきました。人口の約20パーセントが漁業就業者で，入江が多く潮通しの良い長い海岸線を利用した漁船漁業と養殖業との複合経営で漁家経営の安定を図り，町民純生産の約30パーセントを占めています。

東町漁協は正組合員529名，准組合員223名で，ブリ，ハマチ，タイ養殖を主体にゴチ網，定置網，まき網，カゴ網，一本釣漁業等を営み，昭和63年度の総販売取扱高は約82億円となっています。

2　グループの組織と運営

漁協婦人部は昭和36年に貯蓄推進運動を目的として20数名で発足しましたが，現在は９地区172名となり，部長１名，副部長２名，監事２名，相談役１名の他，各支部役員18名の役員がおります。そうして近々には３地区の婦人部約40数名の新部員を迎えようとしています。

主な活動としては，表１を見ていただければわかりますように，漁協運営への協力から生活改善に至るまであらゆる活動を積極的に行っています。

活動は結成当時，魚協からの助成金10万円で行っていましたが，現在は漁協の助成金100万円をはじめ会費等を合わせ190万円となっています（図１）。婦人部の活性化を図る為めに，漁協が生活改善係を設け，栄養士の資格を持った方を婦人部担当者にしていただいています。

私達は，こうした漁協の期待に応える為にも婦人部活動に一生懸命に取り組んでいるところです。

3　活動課題選定の動機

私達の婦人部活動の目標は，漁家の主婦として，母としての誇りを持ち，心豊かな住み良い漁村造りを目指し，色々な地域の問題点を漁村婦人の立場から改善することです。

その為には表２のように，婦人部員の地位向上を謳った県漁婦連の要領と併せて，生活改善を目的とした東町漁協婦人部独自の目標をたてております。このように私達は，漁協婦人部員でし

かやれないような点に着目し，地道に活動をして行く事が最も大切だと考えています。

4　実践活動の状況とその成果

①　合成洗剤追放運動

東町のように漁業がとても盛んな所では，漁場の環境保全に十分留意しなければなりません。そこで，海の汚染原因のひとつである合成洗剤を追放して天然石けんの普及に努めるように，石けんを一人一人に販売し使用してもらいました。当初は「泡が立たず洗った気がしない」等と売れ行きも思わしくありませんでした。

しかし，合成洗剤の有害性を説く映写会を繰返し行ったり，町の産業祭，水産の日の行事等，あらゆる催しで販売をして公報活動に努めた結果，天然石けんを買い求める人がどんどん増え，図2のように売上げ高は順調に伸びてきました。今では，一般家庭や商店からの注文も多くなってきています。

さて皆さんは台所の廃油の処理は，どのようにしていらっしゃいますか。私達は廃油を利用した石けん作りに取り組んでいますが。手軽に作れ，汚れ落ちが良いと大変好評です。今迄廃油は利用価値がなく，処理に困る程でしたが，ちょっとした工夫が海を汚す側から海を守る側へと一変させるのです。

手づくり石けんはまだ研究中ですが，こうした部員の意識の高揚は，海をきれいにする運動を通して培われた素晴らしい成果だと考えます。又，漁協と鹿児島大学水産学部附属実験場が共同で行う漁場保全研究において，地元漁場の水質，底質等を毎月調査しておりますが，図3のリン成分含有量の推移でもわかるように，東町の沿岸はここ数年浄化される傾向にあると報告されています。

この事は必ずしも私達の活動の成果だけだとは断言できませんが，「きれいな海からおいしい魚」というスローガンで活動してきた地域全体の意識の向上によるものと考えてもよいのではないでしょか。

②　魚食普及

私達婦人部では，健康管理，食生活改善活動としてブリの魚食普及や貝割大根，レタス等野菜の種苗配布による無農薬の家庭菜園作りに努めており，とても喜ばれています。

養殖ブリは，スーパーに行ってもすぐ食卓へ出せる状態（切身パックケージ）で売っており，料理法も刺身，照焼等しか知られておりません。そこで，消費者ニーズに合い現代の子供の嗜好にマッチした料理法等を婦人部員の工夫でなんとかならないかと考え，役員会で協議しました。その結果，子供達や他の婦人団体へも呼びかけて広く料理講習会を実施したり，和風，洋風，中華風の調理方法を考えました。特に，これまで捨てていた胃袋の煮物，ブリのたたきを各種催しで試食もしていただきました。例えば今年の8月19日の「水産の日」には，恒例である魚類供養塔の献花の他，ブリの試食コーナーを設け，婦人部の手による4～7kgのブリ50本で「タタキの活造り」をしましたが，約1,000人の参加者に大変な好評を得る事ができました。

③　研修旅行と「子供を見つめる日」

年1回，役員研修，婦人部員研修を実施していますが，ここ数年，養護学校や老人ホームへ

の視察に重点をおくようにしました。これは，感謝の気持ちと思いやり，豊かな心の失なわれつつつある世情の中で，もう一度「自分を見つめ直す機会を得るよう」と考えたからなのです。こうした視察先での先生と子供との触れ合いを見ていると，それぞれの心にこみあげてくる「何か」があります。

漁村における子供達の健全育成を図る為には，婦人の力が必要です。その為に，毎月5日を「子供を見つめる日」と定め，黄色い旗を各家庭に配布したり，親子文庫として各地区の部長宅へ図書を置くようにしました。

又，私達は主婦であると同時に，漁業従事者でもあり，子供と過ごす時間は，夕食から寝る前のわずかな時間しかありませんが，自分達が研修旅行で学んだ心の豊かさを何とか子供達に伝えてやりたと思い，親子の触れ合いの場を多く持つように努めております。このように部員一人一人が更に心の勉強をして行く事が必要であると思います。

5　今後の活動計画

現在東町では，ブリの加工を主体とした水産物簡易加工処理施設を建設中で，来年度には稼動します。東町はブリだけでなく他の魚介藻類の宝庫でもあり，婦人部でも加工品の研究に協力して行きたいと思っております。

今後は合成洗剤追放の為の親子学習会の開催や毎月「石けんの日」を定め，漁協や公共施設に垂幕を掲げる等，公報活動をすすめて行きたいと思います。

最後に，私は，婦人部活動を通して仲間との触れ合いの大切さ，そしてその触れ合いが私達の活動の原動力になっている事をはっきりと認識する事ができました。皆さん，お互いに視野を広め，しっかりした価値観を持ち，私達の母体である漁協と連携を密にしながら，人間性豊かな住み良い活力ある漁村造りに積極的に取り組んで行こうではありませんか。

私達婦人部の活動は地道な活動ばかりです，地元の漁協や町は勿論，普及員の先生はじめ県や県連団体の理解と協力が是非とも必要です。

今後共，みなさま方のより一層の御指導，御支援を賜りますよう，お願いいたしまして発表を終わらせていただきます。

表1　主な婦人部活動の状況（昭和62年度）

活動目標	具体的な活動状況	回数
・貯蓄推進 ・公共料金振替推進 ・共済事業推進	漁協職員と合同で浜まわりを実施	2
・合成洗剤追放運動	・石けんの普及，販売	随時
・魚食普及運動	・料理講習会，試食会の実施	8
・無農薬の家庭菜園づくり運動	・野菜の種苗を各家庭に配布	2
・家計簿記帳の推進	・家計簿を各家庭に配布	1
・無駄と見栄をなくす運動	・「おかえし廃止のし袋」の販売	1
・「子どもを見つめる日」の推進	・黄い旗の配布，図書の配布	12
・その他	・役員研修，婦人部研修の実施	2
	・各種会合への参加	40
	・役員会の実施	6
	・スポーツ大会の開催	1

表2　東町漁協婦人部活動目標

(1)　私達は漁村婦人部としての自覚を強め菜園づくりを通して食生活改善，健康管理等に積極的に学習活動に参加し婦人の地位の向上に務めます。

(2)　私達は優れた生産者になると同時に賢い消費者となり，創意工夫を行いよりよい生活を追求します。

(3)　私達は婦人の一人一人の力を結集して協同組合運動を維持し，活力とふれあいに満ちた人間性豊かな漁村の建設に努めます。

図１　婦人部収支決算の内訳

（昭和62年度）

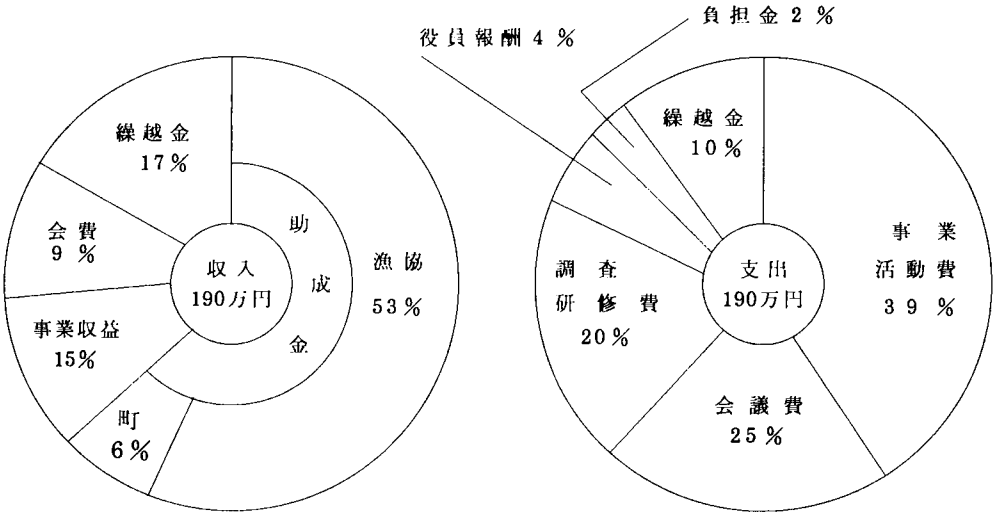


図２　天然石けん売上高の推移

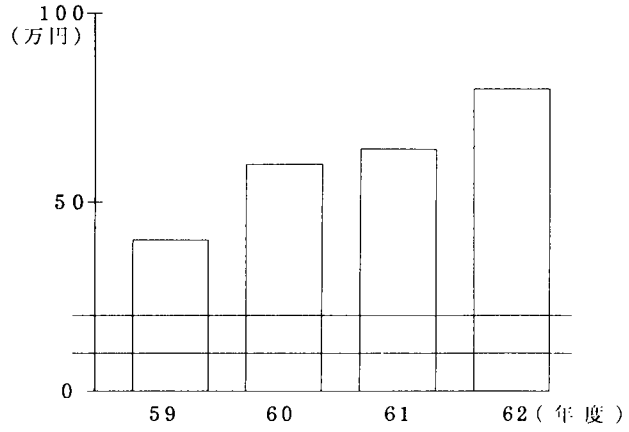
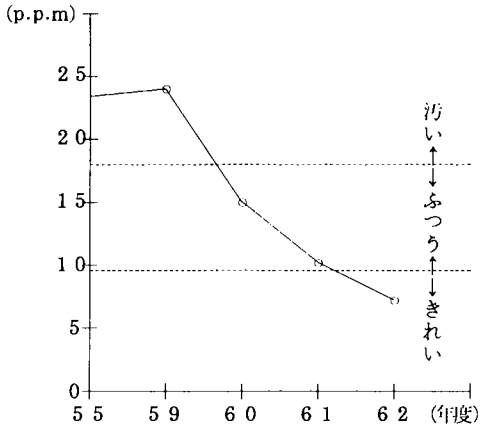


図３　東町沿岸漁場の
リン平均含有量の推移



組合せ漁業に取組んで

川内市漁協黒潮会　濱田成敏

1　地域の概況

川内市は，本県の西北部に位置し，東は樋脇町，東郷町に接し，西は東シナ海に面しています。南は冠岳連山を境にして串木野市，北は阿久根市に隣接しています。（図－１）

市の中央を九州三大河川の一つである川内川が悠々と貫流し，東シナ海に流れ注いでいます。市の人口は７万２千人余りで年々少しづつ増える傾向にあります。

薩摩国分寺跡，可愛山陵，新田神社等の文化的史跡と原子力発電所，火力発電所，ＬＰガス，京セラ，中越パルプ等の企業があります。

川内市は，重要港湾である川内港を起爆剤として10万都市を目指し，川北薩の中核都市として着実に発展しております。

2　漁業の概況

私の所属する川内市漁業協同組合は，正組合員283名，准組合員252名で，漁船数216隻です。昭和62年度の総取扱い高は，約1,400トン，12億円（図－２）となっております。

漁業はバッチ網漁業，ごち網漁業が主体で他にヒラメ，アジ等刺網漁業，ハギ籠網漁業等の沿岸漁業であります。

近年漁獲高は，主体漁業であるバッチ網漁業の不漁により減少傾向にありましたが，昭和62年度は漁業協同組合始じまって以来の最高の水揚げがありました。

漁業経営体は専業漁家は少なく，殆どが兼業漁家であります。バッチ網漁業，ごち網漁業を除くと３トン未満の小型漁船を利用しての漁業であります。

漁業就業者は高齢化が進み，特に30才未満の漁業者が少なかったのですが，最近は中卒，高卒Ｕターン青壮年の着業があり40才以下の漁業者が多くなりました。

川内市漁業協同組合の漁場は川内川の影響等で好漁場（図－３）でありますが，先にも述べましたように川内川河口の両岸に原子力発電所，火力発電所が建設され，又重要港湾である川内港の拡張工事等で漁場が狭くなっております。

3　水産振興会の概況

私達の川内市漁業協同組合には，漁業種類あるいは仲間同志による研究グループが７つあります。

私の所属する黒潮会は西方地区の組合員18名で構成されております。

主な活動内容は，地区のえびす祭り，海岸清掃，先進地への視察研修や会員間の親睦などをおこなっており，地域漁業振興に取組んでいます。

4　就業の動機

私は昭和40年に上阪し，神戸製鋼に入社して約12年間勤務しましたが，この間，オイルショック，円高等による鉄鋼業界の不況に直面し会社の合理化に伴う人員整理等があり自分の将来に先行不安を感じた時期がありました。

その時考えたことは，自分は海が好きであること，田舎で雑魚磯建網漁業及び一本つり漁業を営む父が年老いてきたことでありました。以前父の営む漁業に従事したこともありその時，習得した技術を基にして，漁具，漁法の改良や新規漁法の導入を行うことにより，これからの生活の場を海にかけてみるという強い意欲を持って，昭和52年１月にＵターンし，父と一緒に雑魚磯建網及び一本つり漁業に従事しました。

このことは，自分一人だけの考えだけでなく，夫婦で色々話合った結果，当初は生活の不安等で渋っていた妻の暖い理解，励まし，協力があったことは言うまでもありません。

5　経営の内容

１年余り父と二人で操業してみましたが，使用漁具数，操業場所，使用餌料等の操業方法などで意見のくい違いが生じてきたことや又，父の所有する漁船が約１トンで小型であったため。

Ⅰ）　船上作業がしにくいこと。

Ⅱ）　出漁日数が少ないこと。

Ⅲ）　使用漁場が限定されていること。

Ⅳ）　収益が二分されること。

等の問題が生じ，当初期待していた程の収益があがらなかったので，父と話合った結果昭和53年２月父所有の漁船のうち船外機付船0.7トン型一隻を譲り受け独立し，雑魚磯建網漁業を初めました。その漁具はアミラン製の三重網20反で操業してみましたが，独立後の水揚状態は限られており，生活も不安定でありましたので，いかにして水揚げ増をはかるかについて自分自身試行錯誤する一方，同種の漁業者や地元漁業者の声を聞き，漁業協同組合にも相談をしましたが，雑魚磯建網漁業だけでは今以上の漁獲増は期待出来なかったので，すでに地元で好結果を得ていたごち網漁業に着眼し，漁業協同組合に再々相談したところ許可の見通しがついたので，会社勤めの間にコツコツためた貯金と，わずかな退職金をはたいて念願の2.75トン，60馬力の中古漁船を購入するとともに昭和55年12月に知事許可漁業であるごち網漁業の許可を得ることが出来ました。このことにより自分の漁業の基盤が出来たと思い，喜びははかりしれないものがあります。

しかし，ごち網漁業の許可は得たものの

Ⅰ）ごち網漁業は二人でないと操業が出来ないため，海に全然出たことのない妻と二人で操業したところ，船酔いや海上でうねりが出た時などは船上に立っておれず座ったままで，ロープ，網をたぐる等思うようにいかず，すだで帰る日も度々でした。

II）瀬の位置と潮流の関連がわからず，漁網が瀬に流され破網したり，袋網がうまく開かず絡まったりの連続で漁獲も思うように揚げることができませんでした。そんな失敗，苦労を重ねるうちに妻も海に慣れ，又，曽根も覚え，ようやくごち網漁業で人並に漁獲出来るようになり56年10月頃からやっと軌道に乗せることができ，それに伴ない水揚げ高も増えてきました。

その後操業は順調で経営も安定しておりましたがごち網漁業者の増加及び同業者の漁船の大型化，漁撈装備の近代化等の漁獲努力の向上により魚族資源の減少傾向が見られるようになり，それに伴い私の漁獲も年々減ってきました。

そこで，ごち網漁業だけの操業では再び経営が不安定になるのではないかと考え，何かごち網漁業と組合せが出来る良い漁法はないものかと思案しました。

まず考えたことは。

第一に，地先沖合に回遊してくる魚について検討する一方で市場調査等を行なった結果，ヒラメ，アジ，カレイ，シタビラメが他の魚に比べ高価で取引きされているのに目をつけました。

第二に，それらの魚をどのようにしてとるかについて考える一方で，県下で既に実績をあげていた北薩地域方面へ視察研修を行い，既存の雑魚磯建網に加えて魚の種類に応じた，ヒラメ刺網，アジ刺網，カレイ刺網，シタビラメ刺網の専用網を導入することにしました。

これらの専用刺網漁業を導入したことと，ごち網漁業の組合せにより漁獲も増え，魚も高値で取引きされ予想どうりの成績をおさめることができるとともに，この時点で私の組合せ漁業への取り組みが整いました。

私のこの時点での操業内容は，ごち網漁業の４月から12月を中心にして，（表－１）

ヒラメ刺網　（１月～３月）
アジ刺網　（10月～11月）
カレイ刺網　（７月～９月）
シタビラメ刺網（４月～６月）
コウイカ刺網　（４月～６月）

をそれぞれの魚の回遊時期に合せて操業しております。

また先ほど述べた漁業の操業内容に加えて60年10月より，サバフグ籠網漁業（７月～10月）を導入しました。

私の60年の水揚高は8.6トン，7600千円（図－４）で大した水揚ではありません。

6　今後の課題

夫婦での漁業経営でありますので，水揚金額から漁網，燃油等の生産資材経費及び生活費などを差引いてもまずまずの経営でありますが，近年，魚の形も小さく，魚の資源も減っている傾向でありますので，関係機関の協力により魚礁の設置及びヒラメ，タイ等の稚魚の放流に積極的に取組み，資源の維持増殖をはかることが大切だと考えております。

参考までではありますが，私達の川内市漁業協同組合は，昭和62年度より単独で，ヒラメ稚魚（７cm前後）２万尾を放流し，今後も引続いて実施していくことになっております。

また，魚価の低迷や消費の伸び悩みが続いております。

このためにも，鮮度の保持や活魚出荷など消費者ニーズに合った流通体形を整えることが大切だと考えられます。

以上をもちまして私のありきたりのつたない発表を終らせていただきますが，私達夫婦が念願していますことは，大型漁船への代船建造であります。この夢に向って夫婦で力を合せて頑張ってまいりたいと思いますので皆さん方の御協力，御指導をよろしくお願いいたします。

図1　川内市位置図

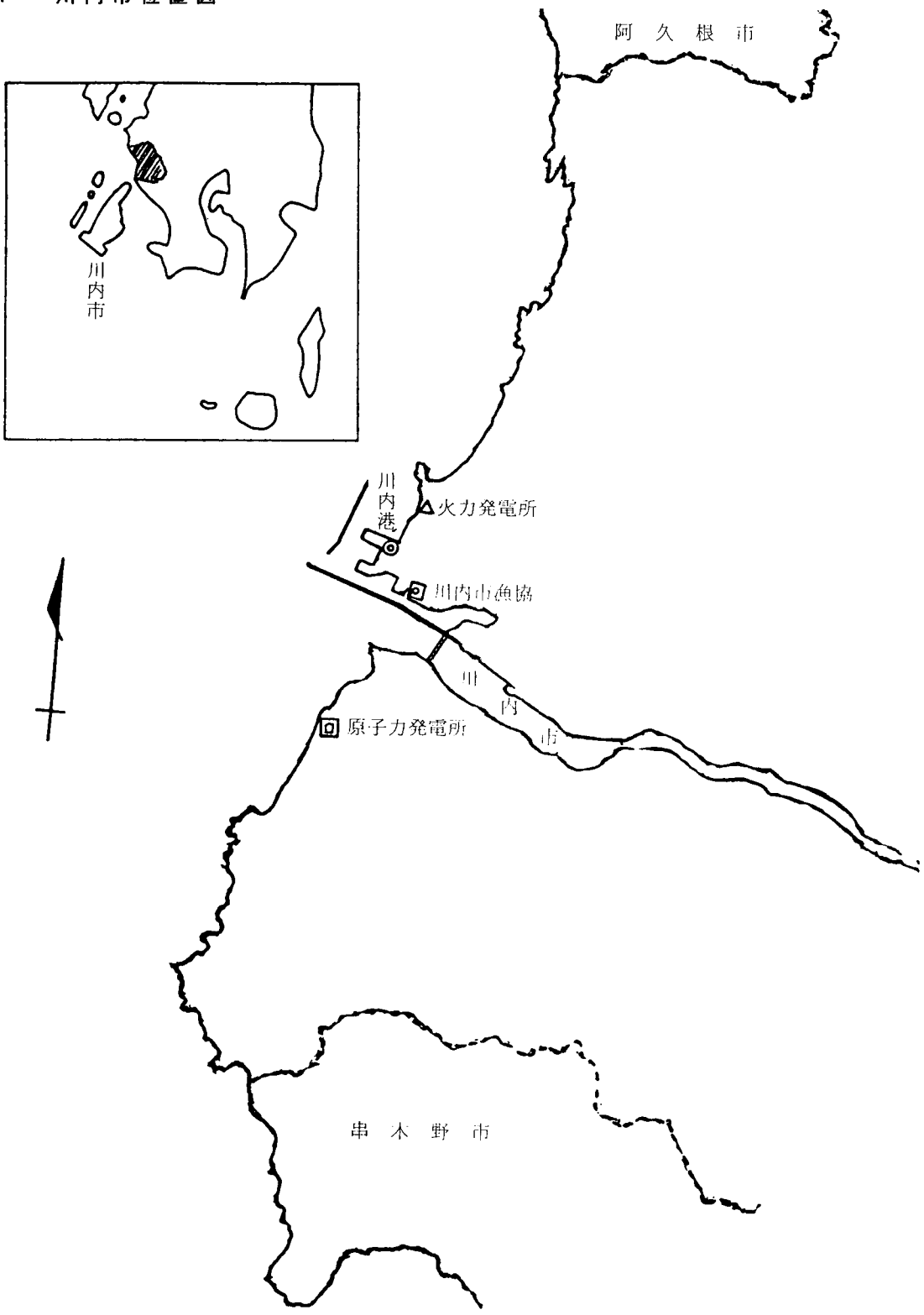
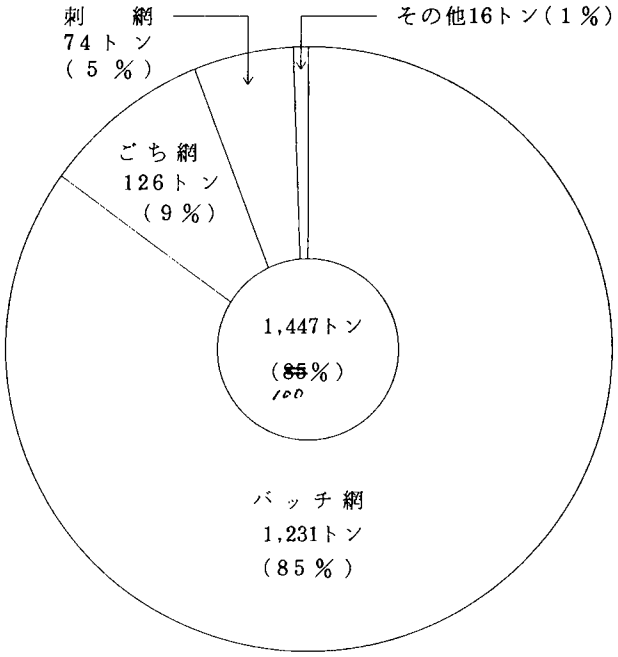


図２　川内市漁業協同組合の水揚高

（数　量）



（金　額）

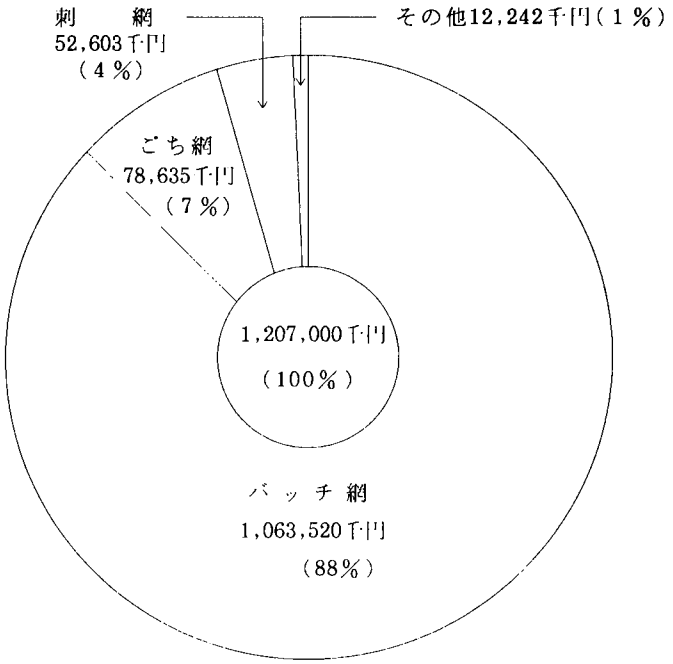


図3　海況模式図

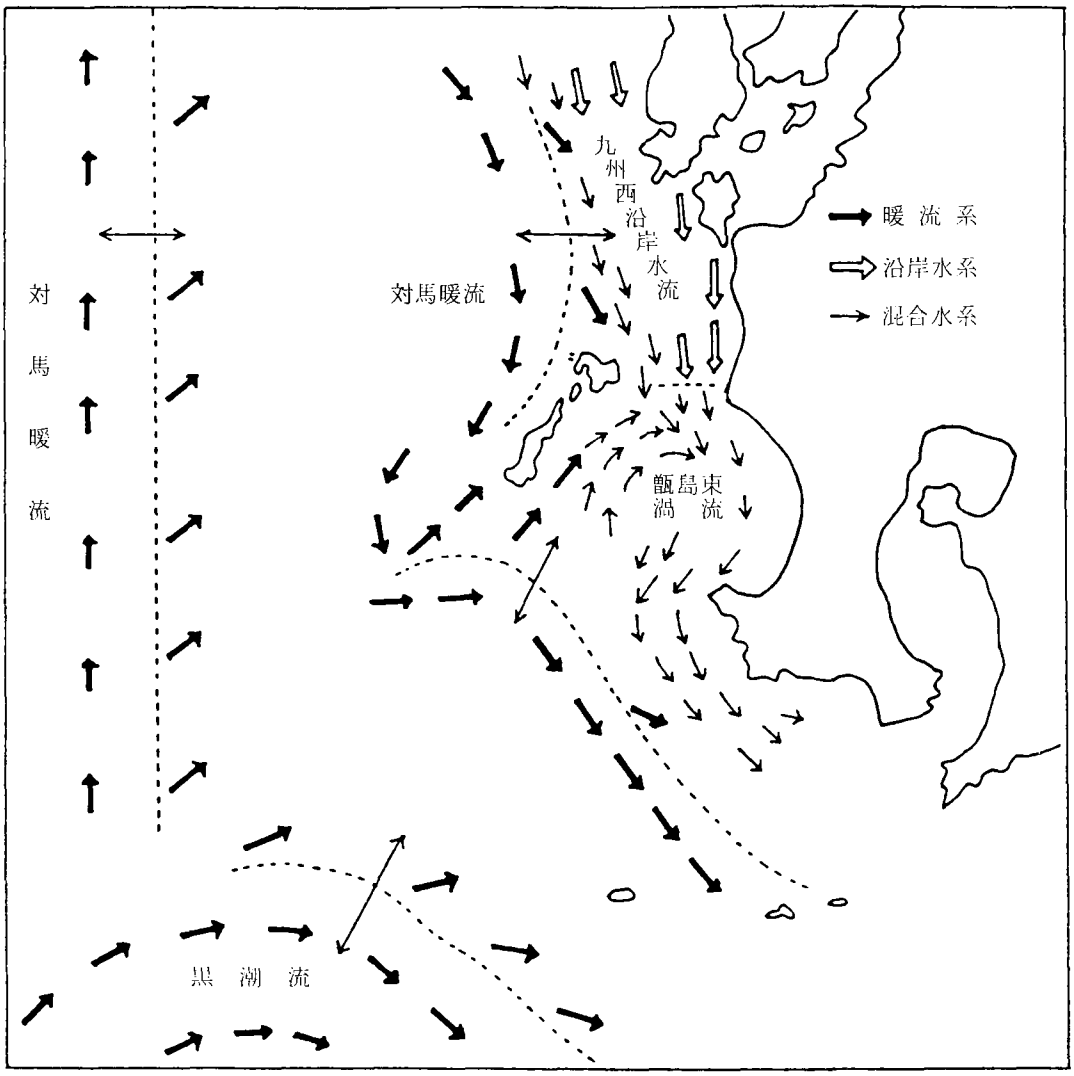


表1　操業形態

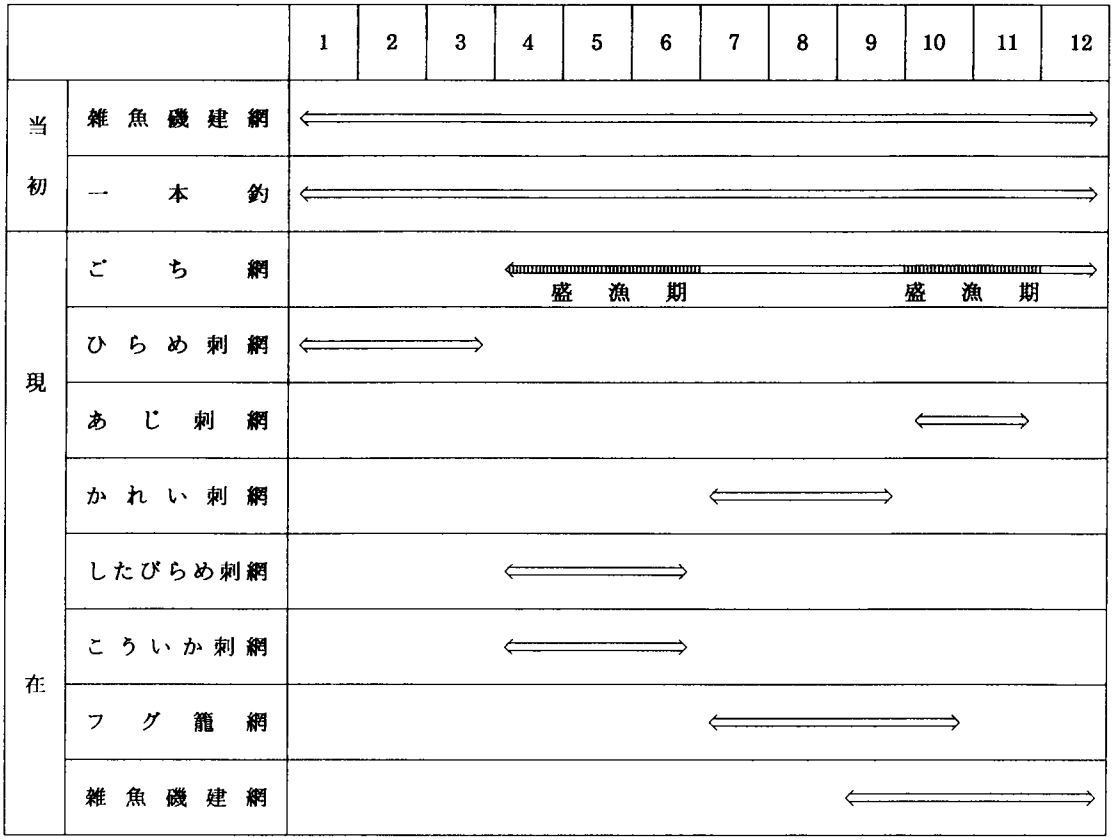
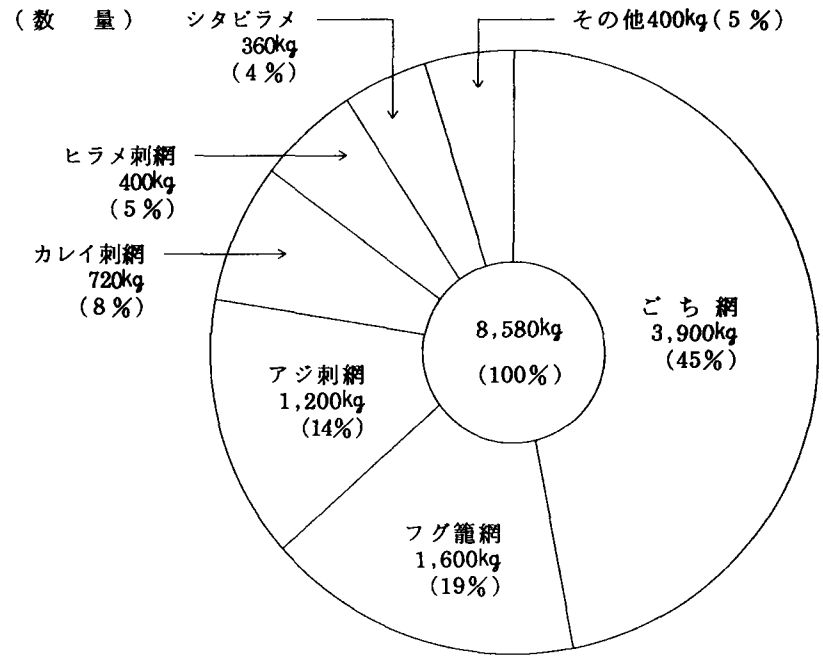
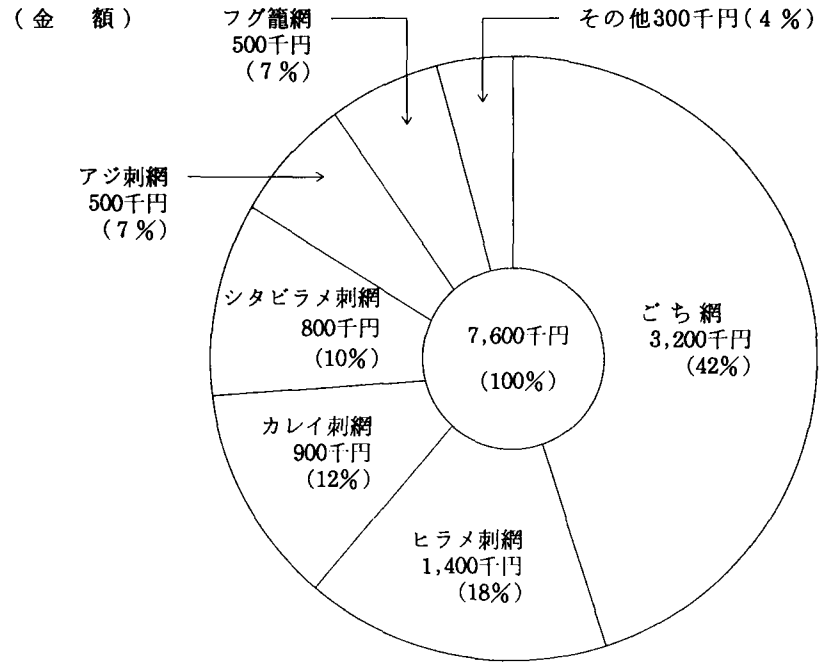

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
当初
現在
雑魚礁建網
一本釣
ごち網
盛漁期
盛漁期
ひらめ刺網
あじ刺網
かれい刺網
したびらめ刺網
こういか刺網
フグ籠網
雑魚礁建網

図4　昭幸丸の水揚高


（数　量）
シタビラメ
360kg
（4％）
その他400kg（5％）
ヒラメ刺網
400kg
（5％）
カレイ刺網
720kg
（8％）
8,580kg
（100％）
ごち網
3,900kg
（45％）
アジ刺網
1,200kg
（14％）
フグ籠網
1,600kg
（19％）


（金　額）
フグ籠網
500千円
（7％）
その他300千円（4％）
アジ刺網
500千円
（7％）
シタビラメ刺網
800千円
（10％）
7,600千円
（100％）
ごち網
3,200千円
（42％）
カレイ刺網
900千円
（12％）
ヒラメ刺網
1,400千円
（18％）